女鑑

明治二十九年八月五日發行



第百拾四號

東京國光社

女鑑第百十四號

目録

栗子



家庭敎育の方針

女子の盡くすべき務めや多し。女子が國家の爲めに盡くすべき務や多し。その多きが中にて、最重く、最大く、なかも、女子に最近く、最切なるは、何なる務ならむ。今更に新う問ふべきことにもあらず、やがて、露も掟も美しき家庭の母となり、色もかをりもうつくしく、花も實も美しかるべき若きものを、やしなひも守りも育てあぐるにこそあれ。これが、女子が國家の爲めに盡くすべき務の、最重く、最大く、最近く、最切なるものなり。さるは、國家の美しからむ爲めには、民草の美しかるべきことは、もとよりさなくてはかなはざればなり。國家のますます美しからむ爲めには、民草のいよ〳〵美しかるべきことは、もとよりなからさるべからざればなり。而して、その美しき民草を作りあぐるものは、何ならむ。世の中の光りも榮もあらむ、敎の庭の雨風もあらむ、されど、それはいと末のもの

なり。美しき人草をつくりあげむ本は、家庭にこゝろあるなれ。家庭の露に掟にこゝろあるなれ。而して、此の大切なる家庭をあづかり、此の大切なる家庭を守り、若きを養ひも敎へも導きも守りも作りも立つるものは、何ならむ。やがて、母たるが務なり。母たらむ令孃たち、誠にいましたちが務なり。而して、家庭や斯の如く大切なり。家庭を司るや、斯の如く大任なり。されば、令孃たち、これをこゝろ、なれたちが最重く大く近く切なる務と申すなれ。

家庭や、誠に令孃たちが大任なり。美しき家庭に立ち、美しき子を養ひたつるは、誠に容易のことにはあらざるなり。よくこれを守り、これを養ひ、これを敎へ、これを導き、これを作りあげむには、令孃たちが女子たる任は終へたるなり。國家の爲めに、まことの女子たる任務は、誠に盡くしたるなり。

家庭の敎訓は、極めて大切なり。極めて大切なる故に、また極めて大難事なり。さかも、家庭の敎訓は、智育を本とせず、學術技藝の指南は、末なり。むねと心意

上の教養を、本旨とするなり。心意上の教養は、學理を教ふる如く、講義的にては不可なり。かゝるべしかゝるべきなりと、理を講じ理を說くが如くにては、不可なり。また、かくせよ斯くすべしと、命令するが如きも不可なり。また、法律の如く、しか〴〵ずべからずと、規則を以て束縛する母のみなるも、不可なれば、また、なか〳〵に自然にまかせて放任なるも、もとより可ならず。心意上の教養と、家庭の教養は、おのれ嘗て令孃たちに申したる如く、感情的ともいふべき教導の道を取らざるべからず。われまづ美をいひ美を行ひ、美に立ち美を行き、而して、兒童の自らこれに感じて、わが美にらなひて、自ら美をゆき美に進むやうならざるべからず。かゝるものなりと理を說きすゝめざるも、かくすべしと命令せざるも、かくすべからずと束縛せざるも、自ら兒童の感動し、知らず〳〵心染しゆきて、說かざるもよく知り、命令せざるもよく行き、束縛せざるも、よく犯さざるやうならざるべからず。故に、家庭の主たる母なる人が、まづ自ら始終兒童の手本たるべきやう振舞はざるべからず。兒童の善良ならむことを欲しなば、わ

れまづ善良ならざるべからず。兒童の端正しからむことをのぞまば、われまづ端正しからざるべからず。兒童のまめやかならむことを望まば、われまづまめやかならざるべからず。兒童の柔和しからむことを望まば、われまづ柔和しからざるべからず。兒童の賢からむを願はゞ、われまづ賢うせざるべからず。兒童の勤勉ならむことを望まば、われまづ勤勉ならざるべからず。しかれば、殊更に說かず命令せず束縛せずして、兒童いつしかこれを見、これを知り、これを習ひ、これをゆき、善くも、正しくも、まめやかにも、やさしくも、勤勉にも成るものなり。さるを、世間の母たる人、まゝこの敎導の道に出でずして、おのれは日高うして起きて、兒童に早起をとき、おのれは自墮落に振舞ひて、兒童に方正ならんことを命じ、おのれは邪險にのゝしりて、兒童に柔和しからむことを掟て、おのれは遊びくらして、兒童に勤勉なれとすゝめ、おのれは言行みだりにて、兒童に謹愼をとき、おのれは心裡いやしうして、兒童に高尙ならんことをすゝむるが如き、世の家庭によく見聞きする所なり。かくては、說くも、すゝむるも誰かきくべき。誰

か從ふべき。斯くては、いかでか家庭の教訓を完ふするを得む。家庭の教訓は、徒らに道をとき理を講ずるよりも、徒らに命令し束縛するよりも、母たる者が自ら手本と成りて、兒童の自らこれに習ひゆくやうならさるべからず。なほいはんことあなれど、こゝには大要をあぐ。また次にいふことあらむ。世の母たる者、母たらむ令孃たち、心せられよ。



錦の裏

坂本三七郎

學者道を說て人に敎ふれども、其の身を修むること能はず。醫師巧に人の病を療して、自から榮養の道を忘ると、古より稱して確言となす。吾人も頗ぶる是等の語の信に刺肉的なるものとす。昔一學者あり、日に其の君に侍して、修身の道を說く、此人家に歸りて、其の講ずる所の孝經を以て、其の父を撻ちしと、學藝此の如くなれども、無益

の極と云ふべし。今の世にも孝子貞女の事を記し、且其の中巳れが微旨を寓して、諷説刺言實に琅々誦すべし。況んや文辭の雅馴にして、流麗なる文を讀て其の人を想へば、仰て尊ふべく、往て之に從はんとす。然れども錦繍の裏に、却て襤褸あるを知らずや。涼臺夏月の夜、簾裡の琴聲を聽けば、人皆淑女を想像す。而して其の人は淫靡無貞の卓文君なるを如何せん。吾人は規言を寄す。琴心情を送る文君たらんより、寧ろ貞淸温雅なる爐に當る野孃を得んとす。吾人は今日の婦女に對しては、夙に此の如き感を懷くものなり。

自から世に誇りて小説家となし、癡情を寫し出して、美の粹を得たりとする女史は、吾人は之を説かず、吾人は筆と行と反し、心と言と相背く女流か、文辭を惜みて、其の心を戒めんとす。何となれば彼等は甚しきを爲ざるもの、幾分の良心あればなり。然れども古より無戒の僧は度し易く、有戒の僧は度し難しと謂へば、吾人は何れをか先にせん、左思右考吾人ならざるも、世の識者は既に憂ひつゝあり。明治の女界は菩薩界か夜叉界か照魔鏡の必用は、化粧鏡の必要よりも急なり。

世人は常に稱す、學を修めざれば、身を起し家を治むる能はずと、然れども學を修めて、紅舌徒らに長じ、他人の女兒を敎へて、却て之を賊ふ。此の如くなれば、女流の

學を修むる是また無益の極なるべし。孝經を以て父の頭を打つと、何ぞ異ならんや。一方には貞女良婦の傳を蕩々說流して其の末流に女兒の溺死を現さむ、今日の女敎は三陸海嘯の慘より慘なり。女子敎育界は天下の識者より百萬德義の義捐を仰がざるを得ず。而して之を救助する道は先づ實踐躬行の四字を踏しむるより急なるはなけん。實踐躬行の語、人皆之を說き吾人も曾て之を云へり。然れども今にして始めて此の語のかたきを覺悟したり。放言高談人多く其の華にして實ならざるを嫌ふと雖ども、男子の放言は之を實行する時あり。放言必らずしも、放縱の空言ならんや。高論時に妙理至玄の地步を出す、豈に空漠の天語雲嘯ならんや。獨り女子の社界に至りては、決して放言縱談を容れず。言行必らず實踐些の怠慢を許さず。少しの虛語を忍はず、怠慢虛語は獨り其の心身に恥るのみならず、男子の放言縱談、世或は之を默許するあらん、女子の此の事ある、人容謝寬假するなく、之を非難排斥せん。故に女子の實踐躬行は男子の半を行ふも其の信を人に取るは、之に倍せん。知らずや一家の信を得るは、細君に基するを、而して細君の信否は實踐躬行の厚薄にあるを、實踐躬行は、心實より虛僞なく、掛まざるべからず。心底の英華發して實踐躬行となり、實踐躬行の跡、自から知らずして他に及ぶ感化の德、是に於てか人に入ること深を見るなり。豈に錦繡

裏面の能く騙する所ならんや。

吾人は實踐躬行と感化とは、至大の効力を及ばすものなるを知る、師弟の情義も感化なり。母子の家庭も感化なり。良婦家に在り、頑父化すべく、惰夫化すべし。況んや子弟をや、又況んや弟妹をや、貧を化して富となすは、誰ぞ富豪蓄財の家主婦の儼然たるを見、不肖の兒化して賢たらしむべし。良婦の膝下鳳雛麟兒の多きを知る。而して是一に實踐躬行のみ、此の如きの大化力黄金鑄すへく、白金鎔すべく、一髪百牛を牽くべし。古人は女子の純粋なる美德を知らず。其の柔能く剛を制する化力を見、怖れて之を抑壓したり。今日の世之を利導して事なき所に其の天性の美德を流し、天下をして圓滿たらしめんとす。之か爲に女界の變遷と共に其の眞相の美を磨き出す教益切なり。讀者諸孃其の心情を正うして恥るなくも、吾人は更に大なるものを以て望まんとす。唯、巧に文を屬し、言辭に妙なりとて、之を實踐の德ある人と云はんや。錦繡の美を裝ひて、其の中を襤褸にせんより、吾人は錦衣の淸きを欲するものなり。

女學校創立主唱者（第百拾壹號のつゞき）

藤田武光

初にいふ我が御國の嘉穀の種たりとも、その肥培の仕方悪き時は、却りて、病害を

發することあり。人も、小天地にて、その母は、地なれど、地性よく、肥培の仕方よき時は、善人を生じ、地性あしく、肥培の仕方よからざる時は、惡人を生ずるは、天地自然の道理なり。されど、神功皇后は、御懐姙の御身を以て、三韓を伐従へたまふ御武德備らせたまへばこそ、この御腹より、御誕生ましく〱し應神天皇は、八幡宮と崇め奉り、我が御國の威武を守らせたまふ御神とはならせ給ひけれ。朝比奈義秀が勇は、その母巴御前の勇をひき、相模守時頼の賢は、その母禪尼の賢を稟けたるものにて、よく、その理を知るべきことなり。胎敎とて、婦人懐姙すれど、寢るに、側たず。座するに、邊らず。立つに、跛せず。邪味を食せず。左道を履まず。割正しからざれど食せず。席正しからざれど座せず。目に、惡き色を見ず。耳に、惡き聲を聽かず。口に、惡き言を出さず。手に、惡き器をとらず。夜は、正しき書を讀み、朝に起きては、立居、振舞を正しくすれど、その生るゝ子、形容、端正にして、才德、人に勝るとあり。これ、胎敎を守るの德にて、人に、性と、習とあれどなり。武家は、忠孝義勇の子孫を設くることをこそ願ふべけれ。然れど、容より、心掛のよき女を撰びて、妻とすべきことにて、物よみ、手習等、母の心がけたらんには、文人を出生し、長刀、小太刀等を心懸けたらんには、武人を出産すること、疑

なし。町人の妻とても、心懸よき時は、實體に、我が家業を稼ぐよき子も出生すべし。江戸子といはるゝ者に、身上持得ず、不埒ものゝ多きは、その根本、母の心懸よからぬ故のことぞかし。諸侯の奥へ、幼年より、奉公に出し、生涯、宮仕させんことを願ふ人のことは知らず、末々、外々へ、縁づけんと思ふ心掛の親達は、その子に、右等の遊藝を習はしむるは、無用なることにて、よき子孫の種を蒔かんと欲する田地には、よからぬ肥培の仕方なり。婦人は、和ぎ順ひて、貞信に、情深く、靜なるをよしとす。女の法を去つけんと欲するには、先、物讀ますべし。されど、支那の書を讀み覺え、文字がちに、ふみかくは、女に似氣なきやう、源氏物語などにも見ゆ、學問のしかたにより、却りて、害ともなるものなれど、唯、和解の女孝經、女大學等の種類、その外、教訓になるべき假名交りの文章、および、詩歌などを、手本として、手習させ、その意を、まめやかに説聞かする方よろし。又、女子は、第一、行儀を去つけてよし。萬の愼方は、禮にあれど、小笠原流なりと、伊勢流なりと、躾方は習はすべし。長刀、小太刀等の武藝を、女に習はするは、當時の御治世には、似氣なきやうにいふ人もあるべけれど、武士の娘は、いふにおよばず。町人の子にても、諸侯の奥に、一生、宮仕させんと欲する人は、かならず、稽古さすべ

きことなり。奥向は、男子の勤仕する者なければ、非常の節の心懸にもなるべきことなり。さて、又、織縫紡績のことは、女の、第一とする業なるを、いやしきことのやうに思ひて、今は、縫物さへ、得せぬ女のあるは、いかなる淺ましき事にや。いにしへは、天皇の御后すら、御自、たちぬひしたまひきといふ事も聞けり。たとひ、家富み、人多くつかひて、物縫女を召仕ふ身なりとも少しは、慰にも習ふべきことにて、これを覺ゆる時は、木綿の布子も、容易には着られぬといふ冥加を知り、質素を守る敎になる事なり。因りておもふに、少女の爲に、女學校といふものを、御府内處々に取建て、女にて、文字も、可也によめ、和やうの手跡をよくするものを、師匠として指置き、右に申す如く、女子の敎訓になるべき筋の事どもを、手本となして、書習はせ、まめやかに、道理を說示し、第一、規則を嚴にして、行儀をしつけ候樣にいたし、晝より後は、毎日、かはるぐ、會日をきはめて、和歌の師、躾方の師、長刀、小太刀の師、出席して、夫々、好の藝ををしへ、扨物縫ひ、機を織り、絲をとり、綿を摘むことををしふる女共を抱置きて、是、亦、好の事を習はせ、此の如く、法則を立てゝ敎諭いたし候はゞ、幼きものゝ心は、白絲の如くなれば、自然と、よき風に染みて、惡き風にそまらず、子孫の種を蒔くには、よき田地

の肥培の仕方と存候に付、予も、日あらず、最寄に、一個處、右の女學校を取立候志願にて、まづ、其の趣意を、四方の小女の親達に告げ申度、婆心の一言を書きしるし候。その仕方、よろしき事におもはれ候人達は、遠慮におよばず候間、右の女學校を、何れへなりと取立、御教諭の事、希ふ所なり。たとひ、ひろく、御府内におよぼし、なべての風俗を化するにはいたらずとも、萬分の一にても、これをよしのゝよしとして大和心に歸り咲きの、朝日に匂ふ花もあるべきかと、をこがましくも、是を、山櫻木にちりばむるものなり。

東都西久保
城山　奥村喜三郎藤原増貤誌

天保八年丁酉十月

あはれ、奥村氏の如きは、まことに、識見ある人といふべし。六十年前の江戸時代において、はやく、女子教育に志し、その當時の情弊を論ふこと、かれが如く詳密にして、女學校設立を望むこと、かれが如く切實ならんとは、今日、何人も思ひ及ばざるほどにして、吾人、轉、敬服のいたりに堪へざるなり。

さて、その後、間もなく、明治革新の大御代となりて、百般の事柄、大に、面目をあらため、ことに、教育制度は、殆、完全をきはむるまでに進歩し、小學校、高等女學

校ろの他、各種の女子のための特別學校さへありて、遺憾なく、あらゆる女子を教育するにいたれり。庶幾はくは、奥郁氏、地下にありて、瞑することを得んか。たゞ、吾人の最、遺憾にして、且、奥郁氏に對して、最、忸怩たるものは、氏が論ひたりし江戸時代の弊風は、今、なほ、この東京時代にありて、いさゝかも舊態を改めざるのみならず、却りて、一層甚しきをいたせるにはあらざるかと思はるゝこと是なり。見よ。この進歩せる東京時代の都下の裏面のありさまを。吾人、實に、いふに忍びざるものあり。あはれ、この弊風を改めて、地下の先輩に背かざらんとするは、果して、誰の任ぞや。果して、誰の任ぞや。

(をはり)

女子教育一班（二十二）

三輪田眞佐子

第三　徴驗　こは勸善徴惡のよすかともならむ。古人曰ひけらく、百聞一見に若かずと、げに、人は惡心起らば、忽ち人より擯斥せられ、善業に與せば、則賞賛せらるゝを實驗し、且つ世の善人はいつしか榮え、惡人は遂に亡ぶ實例を目撃し、あるは天地間の萬有に行るゝ順序法則を顧察して、道義の源を知ること肝要なれ。今昔物語に（かぞいろはあはれとも見よ燕すらふたりはさらに契らぬものを）とあり。果して能く宇内

の事物を見ど、悉く我が師たらざるものはあらじ。されど、女生をして、女德を高めむとならば、貞婦の名望を得烈女の名譽を博むる世上の活例を多く聞き、且つ見せしむるは勿論、つね〳〵もれなう、善行を奬勵し、惡事を懲戒して、天は必有道を助け、人は敢て不德を容れざることを徴驗せじむべし。凡そ邪行をなすものは、その始めかゝることは、恐らく人に知れじなど、惡因には悉く惡報あるを免れざる理を知らざるに出るめり。こを以て、おのれは、理論より實際を尊び、先づ舎監の人物を撰び、時々刻に女生の出れるを矯め、幷て歴史的の講義を以て、姐姫の惡名、小町の末路、はた式部の芳名など、千歳の後その應報果して如何ならむを了解せしめむとて、修身書、あるは女傑の肖像さへ利用せんことを述べつ。

第四　敎授　こは未だ知らざることを敎へ、嘗て聞かざることを授くるものなり。思ふに、生れながら人道を悟ることを得んには、こよなきことなれど、實際は天性上智のものならでは、自ら正邪の區別を辨へて、眞の道に進むこと難からむ、況して自ら道を悟るに至らむも、階梯あるを要す、故にこれらを補ひ導びくため敎授を施さゞるべからず。

亦習慣を以て德行を大成するは、その始は自らかく爲すべきもの、あるは、かくなす

まじきものとの理解ありてにはあらず、唯止むを得ずして善行をなすものなれど、もし不善の境界に入るときは。節義を變ずる恐あるのみならず、つね〴〵心に信向なきをもて、稍もすれど邪惡に陷り易し、由りて敎授もて義理を敎へざるべからず。わきて千種万別なる人の行作につき、遂一徴驗して、その正邪を知り得んは、とても望むべからず。されど敎授は實驗せざる智識を得て、德不德を判別し得べし。されど、敎授は誠に修德につき肝要なるものなり。故におのれは、女德を養ふにつきて、學校及び家庭に於て敎授の必要なることを説きたり。從つてその學派及び主義につき熟考せざるべからざる次第をものせり。唯この敎授の欠點は、虛理に偏し易くして實踐すること少し。今日學校敎育に於て、高論卓説を學ぶに比較して、高德卓行の人少きは實事にあらずや。あはれ、船は陸に適せず、車は海に用なし、總て物は應用にこそ。

かゝる方法を以て女德を養はむには、その目的を達することを難からじ、されど、なは女德を如何なる點に進ましむべきかを研究せざるべからず。徒らに靑年女子をして、かくするなかれかくなすべしと、確乎たる標準なうして、五里霧中の境界に迷はしむるものは、尊き人生を害するものとこそ言ふべけれ。

一語にて女德の歸着するところを言へば、女子をして天然を了解し、その心をして天地と貫通せしめ、以て聖人の域に達するにあり。中庸に曰く、誠者天之道也、誠レ之者人之道也、誠者不レ勉而中、不レ思而得、從容中レ道聖人也と。げに人は聖とし言へど、常人の到底及ぶべからざるものとするめれど、彼も人なり、我も人なれど、各、學べば必及ぶべし、若し及ばざらんも、幾ばくか近くならむ。苟も青年女子にして、かゝる見識なきものは、共に語るべからず。

見よ、から紅に水くゝる秋の夕、水堤に眠る眞如の月は柔和慈悲の女姓なり。萬木殆と紅葉するも、その色變らざるは更なり、雪さへ積りてその枝はたわゝにならむも緑の操正しき松柏は、貞節高潔なる女子の天稟に等し。その他、宇内には、眞あり美あり、將た善あり、果して能く天然を以て心となさば、あな尊き婦人となり、いや愛たき女子とならむ。かの區々たる人爲の末禮に拘泥するものは、この天然界に心を逍遙せしめて、大德を養ふに足らずあゝ。

人わざのあやにしきにもまさるなり
おのづからなるさゆりなでしこ



栗子の傳

鹽井ふく子

天變地異よく無辜の人民を害すと雖も、然れどもその德に至りては、毫も傷くる事能はず、反て、之をして名を萬世にとゞめしむ、げに世に人の德ほどやんごとなく重きはなかるべし。

昔時、甲斐の國山梨郡の農夫某と云ふものゝ妻に、栗子とよぶものありけり。年頃川頃夫につかへてまめやかに、舅姑にかしづきていとやさしう孝貞の道怠りなく、その名、村中に高かりけり。初め久しく子なかりけれど、人の子をもらひ受けて、養子となしけるに、後三年ばかりたちて、一人の男子を生みたりけれども、一たん養子となしたるからは、もとよりゆかりあることゝて、つゆおろそかにせず、心をつくして撫養する事終始變る事なかりけり。

その後舅姑も夫もみなみまかりて、栗子は心細くも、たゞ二人の幼子にひかされつゝ、な

ぐさめられつして、朝夕を過ぐしけるが、やゝ幼子も大きうなり、兄は十二歳、弟は八歳となれる年の五月頃、雨いみじうふりしきりたる曉、にはかに百雷の一時によせ來る如きすさまじき音の聞ゆるに、何のひゞきぞと人々おどろきて見亘すまもなく千尋もあらん大浪の湧きたちたる如く、山より水のうづまきて押寄せ來るに、人々あわてさやぎて、ろや山拔と云ふほどもなく、みなぎり來れる怒濤は、狂ひに狂ひ、あれにあれて、人々逃れ出るひまもなく、麓の家をさながら木の葉の如くれしながす勢ずさまじく、さらぬだに、足元よわき老人の腰たゝずなるもあれど、打ちながされて岩角にかしらをくだき手を折るもあり。助けてよと呼ふ聲、さけぶ聲、日來たけしと云はるゝ、虎狼さへ皆水にながれて、吼ゆる聲、千引の石の流れて其處此處をくだくる音ひとしく、大洪水の中にうづもれて、天もくつがへり、地もさけんずるばかり家も垣もれしながされて、一時に世はあら海となり果てにき。

かくて怒濤狂水やゝしづまりしが、溺死せし人の屍は山の如くに積まれ、むざん云ふばかりもなし。その中に日來やさしき名の聞えたる彼の栗子のあらざるに、之もまたれしながされしかど、人々をしむ事大方ならず、處々尋ねさがしけるに、一人の子を背負ひて一人の子の手を引れたるまゝ土に埋れてあるを見出したり、速にほり出して

見けるに、あはれむべし是栗子にて、背に負ひたるは十二歳になりたる養子の方にてありけり、幼き方をこそ背には負ふべきに、長じたるを負へるは養子を重くしたるにてその義氣の深くして、かつ私なきの心、世に稀なる烈女ならずや。

さても人心、平常は生たるも人の子なるもへだてなくはぐゝむ、人なきにはあらねど、事にのぞみては、自らの子にひかるゝものなるに、此の栗子、女と云ひ、殊にいやしき身にて、何の學ぶ處もなきに、天の狂へるにも、地のかきぬるにも、ひとり人の道にくるはず、迷はず、世に公の道をつくしたるは、誠に學ばずして、さとりたる天性の美質にて、世にためしなき限りにて人の德よく天に勝ちたるとも、いはまほしきになん。人々みな感じ〳〵て後國人語りあひて、之がために碑を建て事實をしるして長く國人の龜鑑となしたりとぞさもあるべき事にこそ。

世の中にまゝ子のひがみたるが多く、實子の我まゝがちなるが多きなど云ふは、大方は、母たるものが我子を愛するの私心より、中〳〵に、自らの子にも、人の子にも、二つながらに愛を失ひて、一の心を曲げ、二の心をはしきまゝ、よこしまにして思ふまゝにならしむるなり。世の人、この栗子のむかしを思ひて、ゆめな私の心を起しそ。このたびの奥州の大海嘯にも、此に似たる美談少からず、その美德、美名は、永く世に殘

るべし。あはれ天災は如何ともしがたし。片時も忘るべからざるものは人の道なりけり。

今小町

岡部譲

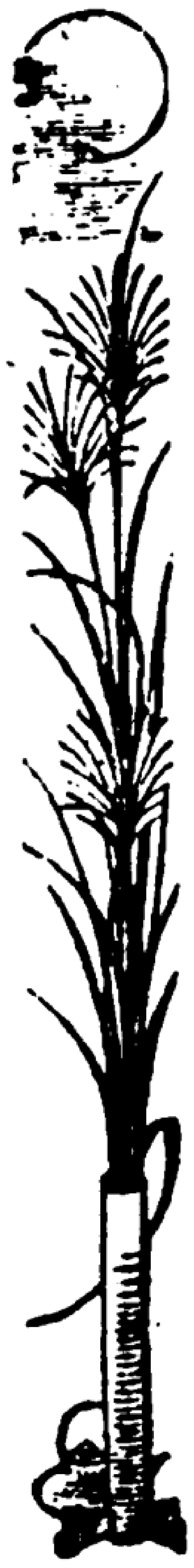
讃岐國香河郡なる佛生山といふ所に、貧しき紺屋の娘ありけり。この娘十八九歳の頃まで家貧しかりけれど、手習ふこともしらず打すぎけるが、或時自らふとおもひけるは、適に人と生れながら、目に一丁の字をだもしらず、人たる道も知らで、草木と共に老朽むはいかにも耻かはしきことなりと、心付きてそのあたりなる三妙といふ所に、來迎寺といふ眞言宗の住持の老僧の學匠ありけるを頼みて、物學びむといひしかど、和尚もその志を感じていひけるは、とても婦女の事なれど漢學はいと難かるべし、歌を詠じ覺えて、歌學をなし、和學を心がけよと教へしかど、最初に百人一首の古き本一冊購ひ得て、其の歌詞を上につけ下にむすびて、旦暮絶えず歌を讀出し、和尚の添削を請ひしに、三四年のうちに其の功つもりて、あつはれの歌よみになりぬ。和尚も今はかゝる者をわが弟子にておかむ事は、如何にも惜むべきことなり、とておのれ价となりて、京都の小澤蘆庵の弟子としてけるに、歌學も追々にすゝみて、あたりの人も

褒めのゝしる樣にぞなりぬ。皆人渾名して今小町と賞しけり。後にはある郷侍の妻となりて、一の宮村といふ所にうつり住みぬ。然るに予か知れる人に、田村內記といふ祠官、中條南圃といふ郷侍など、皆蘆庵門下の人にて歌學を好む者なりしが、彼の今小町とやらむ素は卑賤の婦、歌よむとも何程の事かあらむ、ゆきて試みむやとて、同志の友三四人誘ひて、今小町の宅に往しに、折ふし主人は留守にて、件の婦は木綿の機をおり居たりしが、人の來りしをきゝて、忽に出迎へ、內に伴ひて初見の挨拶をはりて直に歌を詠して出せり。

　まづはたの糸にみだれて鶯の宿とふ聲をまらぬれろかさ

斯くよみて出したれど、往たる客は按に相違して驚歎し、思ひ〳〵に返歌などして立歸りけるとぞ。時は享和の頃にぞありける。

こは讃岐國なる木村通明翁の纂められたるきくまゝの記のうちよりぬき出たるなり。





たちぬひ

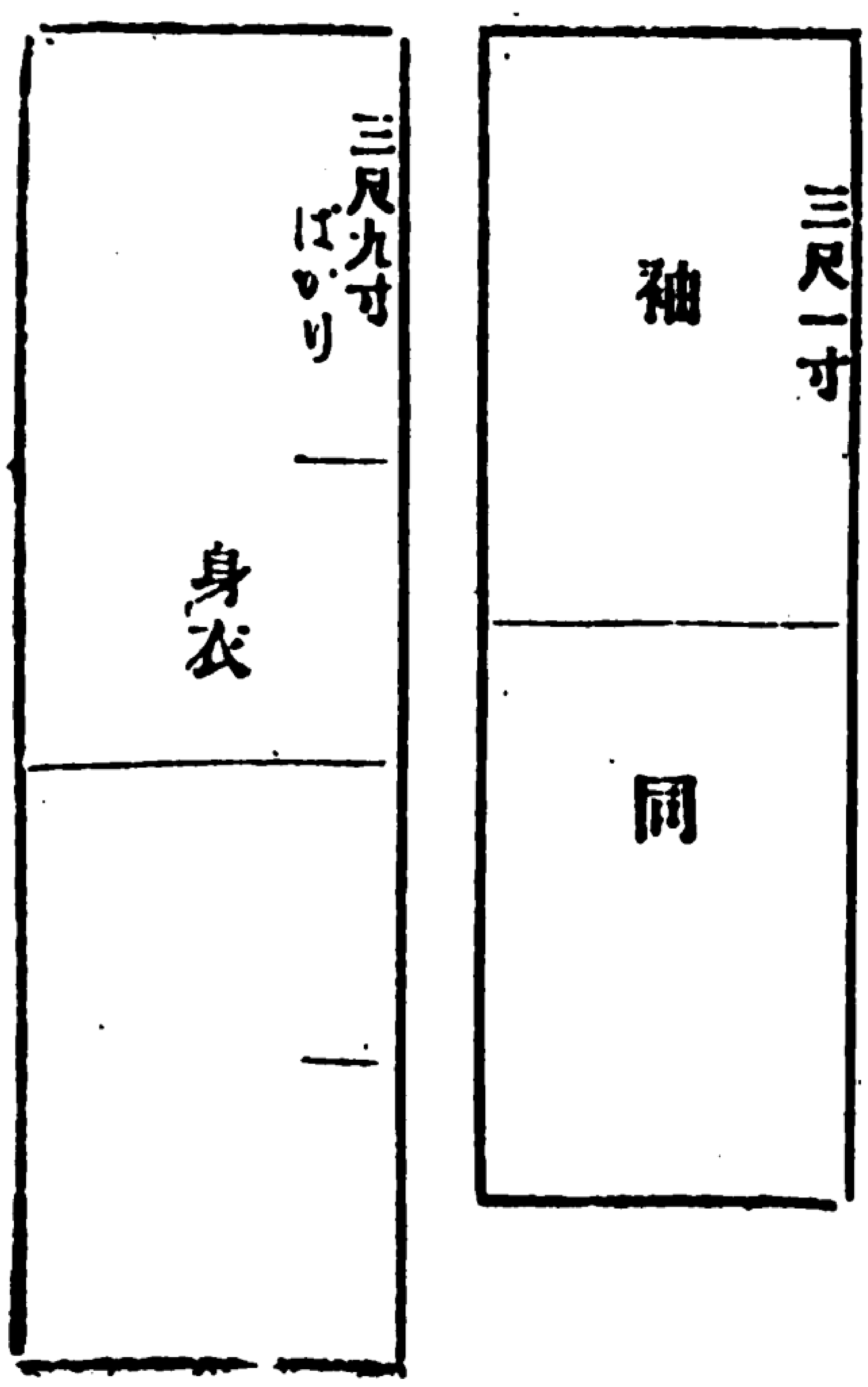
西山たい子

（四十二）濶袖の裁ち方

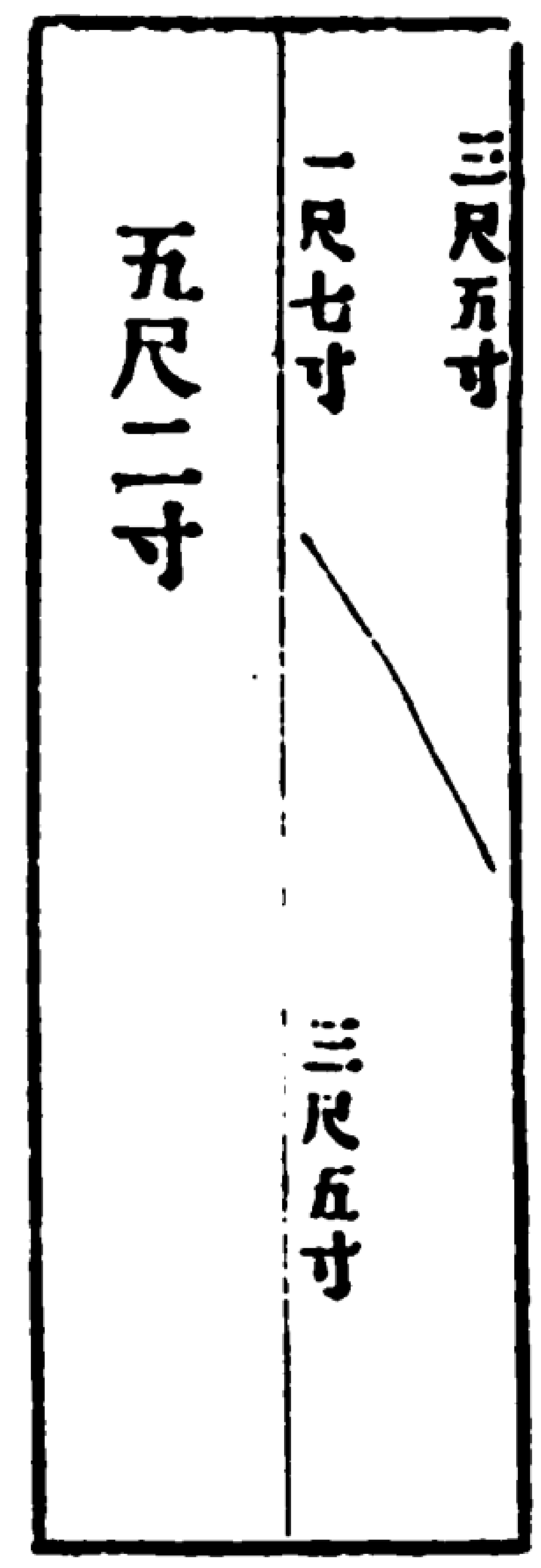
濶袖は表は一反、裏は大方四丈二尺ばかりにて裁つなり。本裁の衣服を裁つ如くに、まづ袖をとり、身衣をとり、次に衽とゑりとを裁つなり。寸尺等は圖にあり。

裏も、まづ袖を先きにとるべし。奥袖は、表袖より一寸ばかり短く裁ち、口切れは表袖と同じ丈にたつべし。裏袖は都合四袖を要するなり。それより身衣は、かへり何寸を見て、表にならひてたつべし。圖を見合すべし。

濶袖表の裁ち

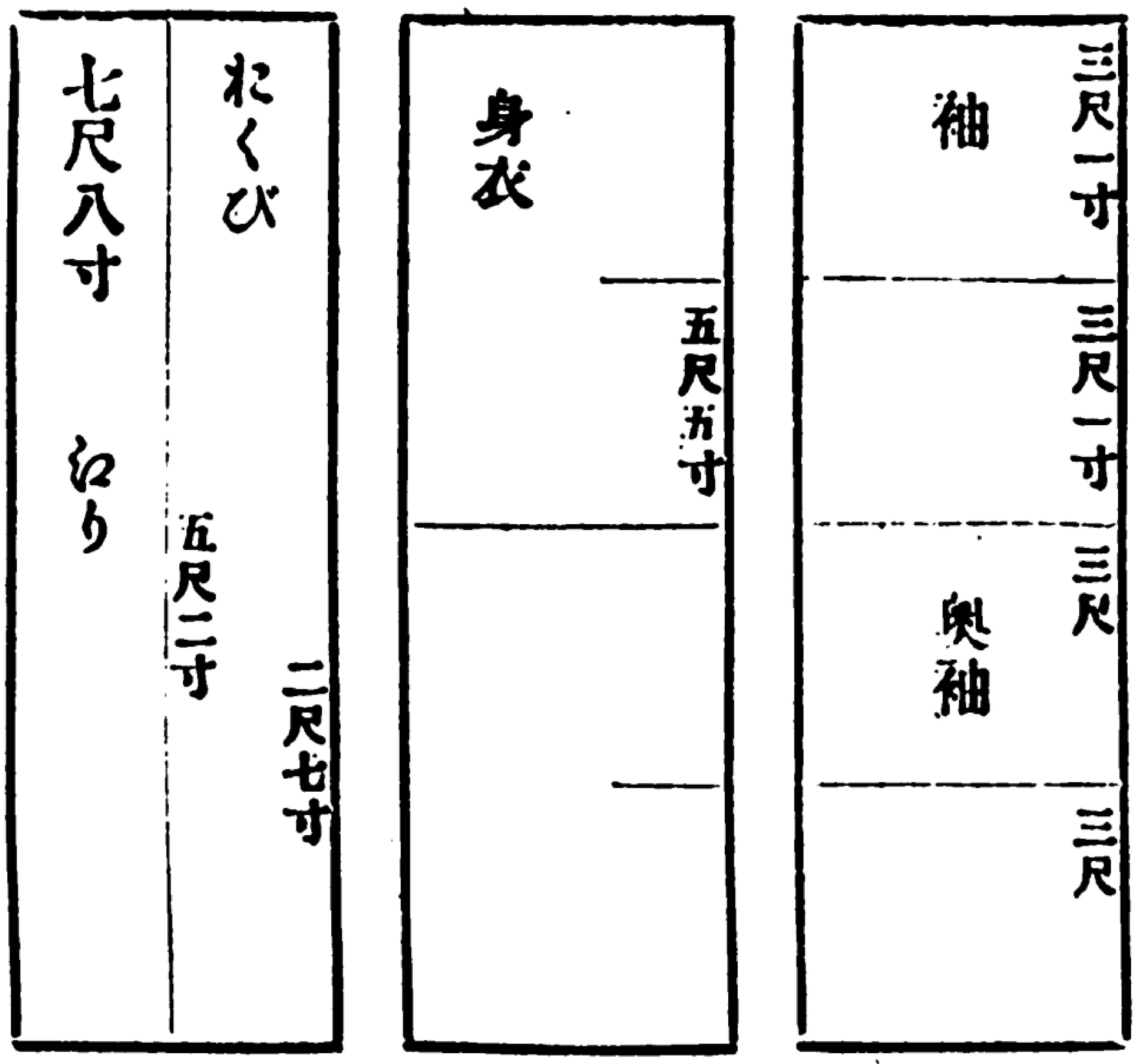


方



但し、裏表とも、衽巾の方をひろく裁つべし。
襟巾は、四寸ばかりにてよし。

同く裏の裁ち方

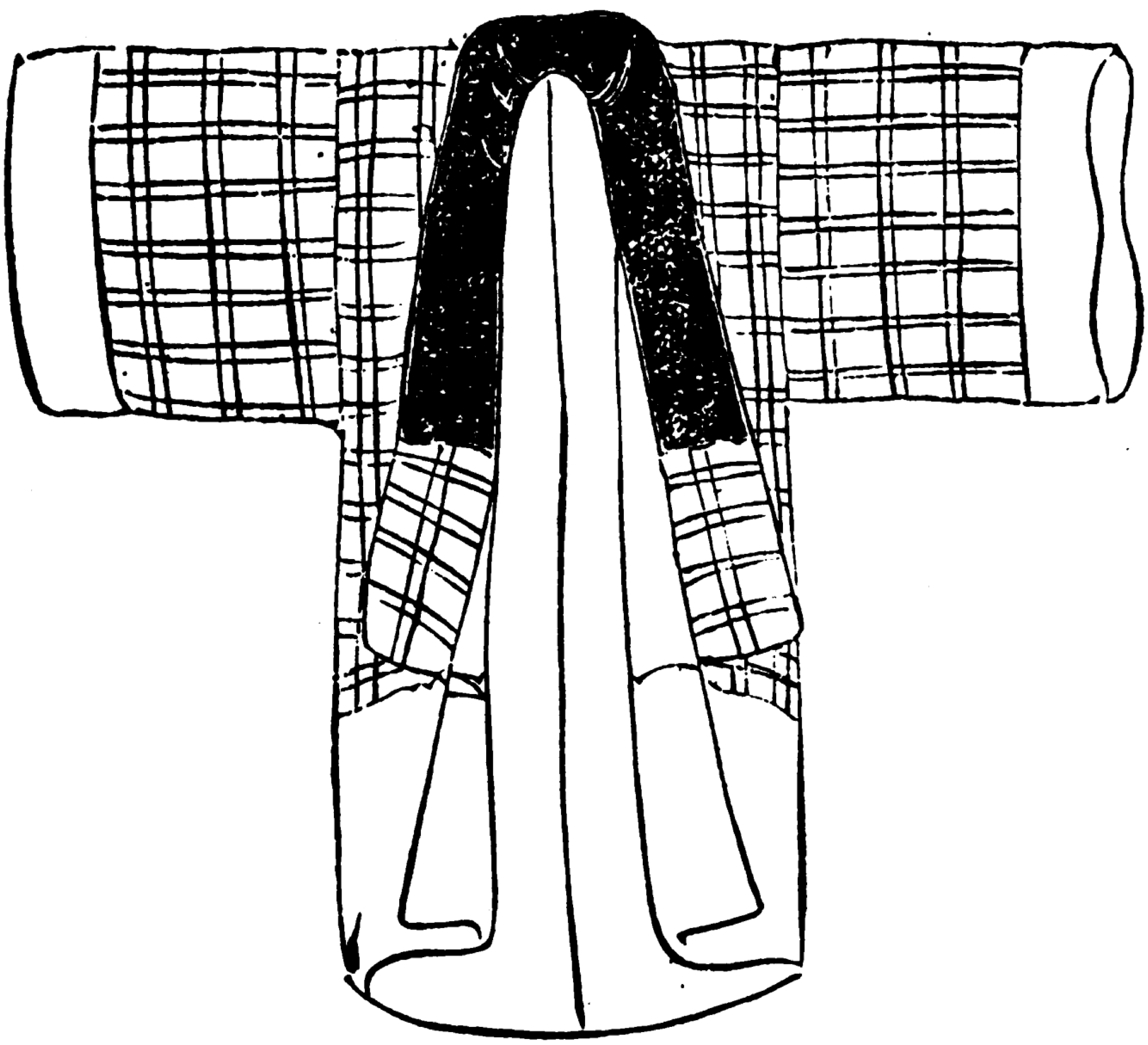


(四十三) その縫ひ方

まづ表袖へ、袖ぶきの切れを、巾のまゝにぬひつけ、袖下をぬひ、また奥袖の袖下をもぬひ置き、(但し、表よりば、八分ばかり丈を短かくすべし。)それより、本裁衣服を縫ひし如くにして、背、脇、衽等をはぎ、裾を平に合せ、襟をつけ、四袖をつけ、衣服の如くにして綿を入れ、絎け上るもよし。

背入れにせんと思はゞ、裏の背を、三尺ばかりあけおきて、つま下より襟まわりを、縫ひまわして、袋のやうにしておき、表へ裏をくみ入れてたゝみ、表の背へ綿をのせて、形を造り、引糸をすみ〴〵につけ、まわりをもとじつけ、袖綿をさし入れ、裏の背のあけある處より引きかへし、よく引き合せて脊をくけ、袖と口切れとを絎け、よき程にとぢつくるべし、但し、綿は、切れよりは、四方とも、一寸ばか

り出しおくべし。



だいどころ

肉類料理

鷄燒　羽と腸を去り、殘り毛を燒きて、牛酪をぬり、強き火にて燒き、生燒の時パンの粉を少しふりかけ、茶色になるを待ち、焙りたるパンの片を、しきたる器に盛り、肉汁をかけて用ふるなり。

燒家鴨　羽と腸を去り、殘り毛を燒き、其頭を切り離し、足は熱湯に投れて、皮を取り、之を脊にくゝり付、其中に鹽とパンの屑粉と、細かに刻みたる、葱を交ぜ合せたるものを詰めて燒き、焙りたる上にて、肉汁をかけて用ふるなり。

燒鳩　羽を取り、腸を去り、足を付けて全身を縛り

て、其中に鹽、牛酪、胡椒、旱芹菜及び麵包の屑粉を、細かに、刻みたる肝等を交せ合せたるものを詰めて、一本の足に、一ッの孔をわけ、他の一本の足を其孔に通し、又別に串を刺し、牛酪をぬり、凡ろ三十分計り燒きて之を焙りたる麵包の片をしきたる小皿に盛り、肉汁をかけて用ふるなり。

雉燒　先づ羽をむしり、腸を去り、腹の中を能く洗ひ、粉にしたるパンを充分投れ、牛酪、胡椒及び鹽を能程に鹽梅して詰め、其剩きたる腹を縫ひ、文火にて全身に火の通るまで、燒くなり、其燒く時間は、凡四五十分間とす。

家鴨油揚　家鴨の燒肉と、細かに刻みたる葱、胡椒、及び食鹽少しを加へ、溫飩粉を、熱き湯にて解き、牛酪を入れ、又　鷄卵の白身を交せ、其中に前に交せ合せたる肉を投れ、之を沸騰たる油鍋の中に投れて、鳶色になるまで揚ぐるなり。

鳥の膽汁　鴨、又は雁の膽に、熱湯を掛け、五分程に切り、人參、牛房、葱、牛肉を交せ、又醬油、胡椒、肉豆蔲など、能程に加へ、鳥の膽の煮たるを待、汁を篩子にて漉し、之に溫飩粉を水にてとかし、汁の中に投れ、かきまはし、前の煮たる物にかくるなり。之を用ふる時に、赤葡萄酒を少し投れるも佳し。

煮燒時間

煮燒の時間は、其種類の堅軟と、其火勢の强弱によりて、多少の、遲速ありと雖ども、大略其時間の、定めあるものなれど、左に之を示す。

煮時間

豕の股肉を鹽に漬けたる物、目方二十斤を煮るには六時三十分間。

水に浸したる牛の舌を、乾かして煮るには、四時間

鹽漬の牛の舌を煮るには三時間。
七面鳥、雁、家鴨、を煮るには四十五分間。
羊の頸肉を煮るには三十分。
鷄の雛を煮るには二十分。
鳩を煮るには十五分。

燒時間

雁を燒には一時間。
兎を燒には一時間。
大鷄を燒には四十五分。
雛を燒には二十分。
雉子を燒には二十分。

造花

はしがき

我が國の人の、ものに巧なるは、今の世にはじまれるにあらず。とほく神代のむかしより、おのづからにそなはれりしなり。いとも〳〵ふるき神の御代にありては、みづ〳〵しき宮づくりをし、戸をかひて衣をつくり、劍をきたへ、鏡を鑄、玉をつくれるなど、自ら野蠻蒙昧なりといふなる外國のとはく及ぶべきにあらず。中古より近きむかしになりても、金工木工などをはじめて、すべての名人あまたいできて、その作れるもの、今になほのこれるがすくなからず。外國人もこれをみては舌をまきて驚くあり。三韓をまつろへてより、はたおりたくみなどさま〴〵の工藝つたはれりしが、我が國に入りてかへりてたくみをませりき。近き世になりて萬國と交通を開きてよりも、百般の藝術つたはれるがなかに、かへりて巧をかさねたるものすくなからず。されど我が國の人の美術にたくみな

るこそ夙に世にあらはれにき。かくて女のなすべき手術にさまざまあるが中に、造花の術は近きころ盛りになりもてゆきて、世の需用も少なからず。かしこきあたりよりも、さる方にれはせありてつくらしめ給ひしに、そのたくみすぐれたりしかば、はめさせ給ひしこともありときく。外國の人そのわざとはく日本には及ばずとて、はめたゞへあへりとぞ。さてこを學ばんには、よき師につきしたがひて見ならひきゝならふべきは、さることとなれども天さかる鄙にすみて、師にともしき人たちのため、さては師にはつきしたがへども、參考の志をりにもとて、その術の大かたをこゝにかゝげんとす。はじめのほどは手意にまかせずとも、魂をこめ術をねりなば、などかは遂に妙處に達せざらん。いやが上にもみがきにみがきてます〳〵光を萬邦にかゞやかすべきなり

人は一代名は末代
人の口をそろし
人に一癖
人を饑させよ
人の口には戸がたてられぬ
人の噂も七十五日

大行は細瑾を顧みず
大海を手にてせく
大海は細流を擇ばず
大陽輝く處には月見えず
大は小を兼ぬ
大事の前の小事



日本文典（十五）

鹽井正男

第二過去　これは、やゝ前に終りたる動作をいふ辭にて、第一過去よりは、やゝ遠き動作をいふ辭なり。されど、第一過去より、やゝ其の意の、自らしかと慥かなる如きけしきもあり。これは、例へば、「鳥飛びけり」「花散りき」といふ如く、其の動詞の連用の格に「き」と「けり」といふ二種の助動詞を添へてあらはすなり。「飛び」は四段に活用する動詞にて飛びは連用の格なり。「散り」は、同じく四段に活用する動詞にて、散りは其の連用の格なり。而して「飛びけり」といひ、「散りき」といへど、今、現に「飛ぶ」にあらず「散る」にあらず。又「飛ばむ」「散らむ」といふ如き未來の動作にもあらず。いづれも既に終りし動作をいふなり。他の活用の動詞にても、皆同じさまなり。例へば「月落ちけり」「昔男ありけり」「花を見き」などいふにて知るべし。古書より、一二の例を取り出づれど、

わが皇御孫の命は、豊葦原の水穂の國を、安國と平けくしろしめせと、事よさしまつりき。

……天の磐座はなち、天の八重雲を、いづの、千別に千別て、天くだしよさしまつりき。(祝詞大祓)

昔、女姉妹二人ありけり。一人は賤しき男の貧しき、一人は貴なる男の德あるもちたりけり。賤しき男もちたる、十二月の晦日に、袍を洗ひて、手づからはりけり。志はいだしけれど、さる賤しき業も、ならはざりけれど。袍の肩をはり破りてけり。詮方もなくて、たゞなきになきけり。これをかの貴なる男ききて、いと心苦しかりければ、いと清らなる綠衫の袍を、たゞ片時に見出でゝやるとて云々。(伊勢物語)

されど、門のかぎりを高くつくりける人もきこゆるはといへど云々(枕草紙)

ふるさとゝ成りにしならの都にも、色はかはらず、花は咲きけり(古今集)

歌の心を知れる人、わづかに一人二人なりき。(古今集)

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。(源氏物語)

この第二過去を現はすに用ふる助動詞は、斯く「き」「けり」といふ二種あり。さて「わかきより書を學びけり」といふも「わかきより書を學びき」といふも、「學びき」も「まなびけり」も、時は同樣なり。第二過去なり。はたして、きを用ふるも、けりを用ふるも、全く同樣なるべきかとたづぬるに、或はいふ、今は全く區別なく用ふるやう成りはてたれど、古

はや、區別ありたる如し。けりは、文章に、むねと用ひ、きは、人に語る上に、むねと用ひたる如し。されど、延喜式なる祝詞には、皆きを用ひたり。その一つ二つを前に例にあげたり。續日本紀の中なる宣命は數十條あれど、皆きとあり。その一例をあぐれど、慶雲四年七月に、元明天皇が御位に即き給ひて天下に宣り給ひし詔命の中にも、

　かけまくもかしこく藤原の宮に天の下しろしめし、倭根子天皇、丁酉の八月に、此の食國天下の業を、日並知の皇太子の嫡子、今御宇しろしめしつる天皇に授け給ひて、並び坐して、此の天の下を治め賜ひ諧へたまひき。

とあり、けりは見えず。祝詞は、人に語るにはあらねど、神にむかひて、申しあぐる詞なれどなり。又、宣命も、もと詔にて、天皇さまが臣民たちにむかひて、いひもさとし語りもかせ給ふものなれど、たまひきといふやうにいひて、たまひけりとはいはぬなり。故に、古へは、さる區別ありし如しといふ。こはわれ大學に在りける頃、師なる物集高見氏のいはれたる事なり。いとおもしろけれど、こゝにあぐ。とにかくに、古へは、やゝ區別ありたる如し。されど、さる區別は、いとはやくよりまぎれはてゝ、専らけりのみ用ひられ、きはいとめづらしくなれり。けりは、また、歌などには、殊に嘆息の意をあらはすにさへ用ふる如き詞にて、けりを用ふる時には、前にあげたる古今集の「ふるさとと成りにし」の歌の如く、過去の動作をいふと共に、何となう詠嘆の意を含むやうなる如し。なほこれらの助動詞の區別は、そのわたりにてこそ、詳しく申すべけれ。

第三過去、　これは、過去の中の最遠きものにて、また、自ら最心の深きが如し。第二過去よりは、なほやゝ遠く前に終りたる動作をいふ如し。されど、この區別は、去かと明には定めがたし。これは、例へど「花咲きにき」「鳥とびてけり」「風吹きにたり」「月いでにけり」「母は教へたりき」「わかきより學びたりけり」などいふ如く、第二過去をあらはすに用ふる「き」「けり」の助動詞の上に、なほ「て」「に」「たり」などいふ詞を加へて、それを動詞の連用の格につけて、その意をあらはすなり。その例は、前にあげたる伊勢物語の例の中にも

一人は貴なる男の徳あるもちたりけり。……

……袍の肩をはり破りてけり。

といふあり。なほ一二をあぐれど、

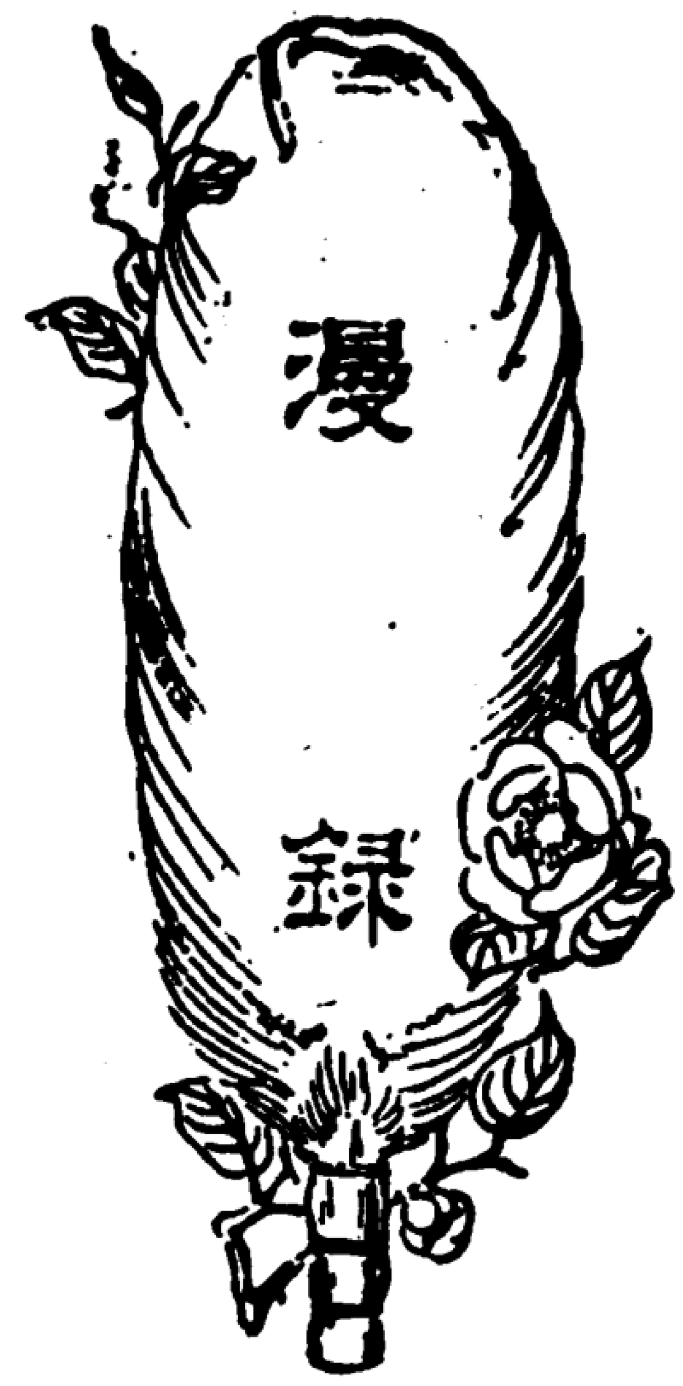
たまたま此の道にまかり入りにけれど、から

だにわきまへられ侍るといふ。（枕草紙）

さはいへど、くにのつかさにて、しれきけることなれど、殘りのよはひゆたかにふべき心がまへもなくしたりけり。（源氏物語）

昔、男、初冠して、奈良の京春日の里に、知るよしして狩に去にけり。その里に、いとなまめいたる女、兄弟住みけり。この男かひま見てけり。おもほえずふる里に、いとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男著たりける狩衣の裾をきりて、歌をかきて遣る。その男、信夫摺の狩衣をなん着たりける。（伊勢物語）

また第一過去をあらはすに用ふるたりなる助動詞の上ににといふ辭を添へたるにたりを用ふる事もあり



夫婦有別

故人　中江藤樹

夫は和義を以て妻を倡道す、和は親しみ和合する德なり。義は道理に從て、裁判し、非道を調へ率る德なり。大抵夫婦の間は、愛欲の私に溺れて、義理の裁判無く、妻にまかれて、親子、兄弟、骨肉の親をもいひ隔てられて、怨を結ぶ事甚しけれど、家を破り、國を失もの、古來其數を知らず。又間々夫婦の交り背きそむきにして、非法見苦しきも有り、是皆人心の迷なり。夫婦の契人間の結び合ひたる如くなれども、根本は形を受くる初より、氣合の縁、天の定る處にして、親の結べる所に非らず。其上祭祀の助、子孫相續の本始なれど、親しみ和合す可きこと勿論なり。然れども、義理の裁判なれど、愛欲の私に溺れ、家道亂れ、別道の常を失ふ、故に和と義との二つを合せて夫の妻を倡ふ道とす。妻は順正の二德を以て、夫に事ふるを本とす。順は心立にうわに物言ひ、顔振り、立ふるまひ迄も和らかに從ふ德なり。正は義理作法を正しく守る德なり。妻は夫を天と頼み、夫の家を妻の家となし夫婦一體の理な

る故に、我が本生の父母を父母とせずして、夫の父母を父母とする、聖人の定むる所にして、不易の天則なり。然る故に、先舅姑に孝行なるを順正の第一とす。さて女の三德を守るは、女事を能く勤め、作法正しく、夫の下知に從ひ家を齊へ、子孫を育て、宗族を和睦し、家人に恩を施すは、婦德の大概なり。夫は陽德に從ひ、外を治めて、和義の德を明かにして、妻を倡ふ。妻は陰德に從ひ、內を治めて、順正の德を明かにして、夫に從ひ、男女、陰陽、內外の差別、此の如く正しく、家治り、父母、兄弟子孫、臣妾、皆相親睦して、和氣合同する故に、夫婦の道、別を本とす。此の道理天命の本然自ある故に、五教の第三に夫婦有別と說き給へり。

あさせのしるべ（つゞき）

故人　藤井高尙

藝は身をたすく

わかき人の友のさわぎに明くらし、をしむべき年月をいたづらにすごすはいふかひなく、くちをしきことなり。おやの世にて家のことおこなふほとは、ほと〳〵にことしげきやうなれど、猶いとまもあり、わかきはものおぼゆることもよけれど、何わざにまれ、ふかくこゝろいれて、ならひておこたらず、つとめたらんには、おろかなる人にてもほと〳〵になしねじやは、そのかたをとり出でんねらびにもなるまじきほどのことは、かたるべけれど、ひとつゆゑつけてしいづることもあるならひぞかし。かくて人といふもの、身のさいはひはかりたきものにて、おもはぬ家のわざはひなどうちつゞき、とき世おとろ

へさいはひなくて、世にかずまへられぬたぐひもあるぞかし。ことにあたりてせんすべなき時などに、かならず身のたすけとなるものは、何わざにもあれ、わかきほどよりならひおきたることこそいとたのもしけれ。むかし、丹後國の田邊の城に、細川君のこもり給へりしほど、寄手のいくさち、よろづのつはものをゐて來て、貝をふせたらんやうにうちかこみてせめけれど、ふせぐべきちからつきて、けふあすはほろびなんとしけるに、古今傳授のことにて勅使ありけるほどに、さばかりせめよせたりしいくさども、ひきしりぞきたりしことなどをも思ふべし。

棒ほどのねがひ針ほどかなふ

がくもんはさらなり、なにごともおのがつとむべきわざをよくつとめて、つひになし得てんとするたぐひのよきすぢのことねがふには、はじめよりこゝろざしをたかく大にたてゝむかしのかしこき人も人、我もおなじ人なれど、よくつとめたらんには、よろづの人にすぐれたることもなしえんものをとおもひはげみて、つとむべし、しかすればほど〳〵になしうることあるべし。我はおろかにつたなければ、つとめても、人なみ〳〵にだにえせじなどゝおもひくつをるゝ人は、深山の谷のうもれ木の、世にしられずくちはてぬべし。

まかぬたねははえず

よきいくさのきみは、たゝかひをはじめぬさき、おもひもかけぬをりに、こゝかしこにしのびて、後のためとなるべきことゞもなし、おくゆゑに、たゝかふときにかつなり。それになぞらへて、をさまれる世にも、ことゝあるをり、さわきまどはぬやうに、かねてこゝろね、そのをりのためとなるべきことゞもを、

しれくべきことになん。

うちまたかうやく

ものをきこえあはせんに、こなたよりかう〳〵のことを、かやうになしてはいかにといふをきゝて、かしらかたぶけとばかりありて、そのなすことのよしあしを、こまかにさだめいふならんよきともだちなりける。人のこゝろにかなはしとて、よしとのみいふは、こゝろうつくしきやうなれど、まことはこゝろざしのあさきなりけり。さる人は、たとへば、中のあしき人のありて、あらそひをらんに、そなたへゆきても、かなたへ行きても、げにさることなりといふぞかし。また、がくもんのうへにては、師とある人や、いにしへのかしこき人やのいはれたることとなればとて、ひたふるによしといふはいふかひなく、あしきふしをも、さだめいふこそ、まことにものまなぶひとのしわざならめ。

かしらかくしてしりかくさず

かりそめにもいつはりはいふまじきことなるを、つねにいひなれて、なにともおもはぬ人あり。いかにつき〴〵しくいひなしても、うちあはぬところありて、しるきものなれど、いみしう心おとりせらるるかし、さてはいふことを人のしんせぬやうになりて、世にふるかひもなし、かへすかへすも、そらごとは、いひならふまじきことになん。

せつないときの神たゝき

せんすべなくくるしきことのあらんをり、たすけたまへと神に申すはことわりなることなれど、かねては神をまつらずいのらずして、おのがくるしきまゝに、にはかにいのるは、たとへば、しる人に、つねはそは〳〵しくして、かたらふふしあるをり、したし

げについさうし、いひよるが如し、されど、神はひろくおほきみこゝろなれば、さるつみとがをも、見なほしきゝなほしたまひ、あはれとおぼして、たすけたまふことぞかし。

大事のまへの小事

大なることをなさんと思ふ人は、ちひさきことにかかづらひてなづむまじきなり。ものをしみし、いさゝかなる事に、はらたちなどしては、なしえがたし、もろこしに、韓信といひける人の　いやしきものゝまたをくゞりしも、このこゝろばへなりき。

毒薬變じてくすりとなる

をさなきとき、さがなきもよくをしへたつれば、としたけて思ひの外によき人となり、わがため、あしくする人も、こなたよりよくすれば、いみじうかんじ、おもひて、あはれになさけふかく、たのもしうなるものになん。阿部の宗任は、義家の君のかたきにて、したがひしはじめは、いかでうちまゐらせんとおもひをりしかど、つゆばかりもこゝろおきたまはず、ふかくあはれみたまひしかば、おもひかへして、よきらうどうとなりしぞかし。

人のふり見て我ふりなほせ

わがあしきことはしりがたく、人のあしきはよく見ゆるものなれど、人のを見て、われにもさるたぐひのことやあると、こゝろとゞめて思ふべし。しかすれば、わがあしきことしられぬべく、しるまゝになほしてよくしたらんには、また見るひともめやすくおもふべし。論語といふからふみに、三人行必有二我師一。とかやいへるも、このこゝろにこそ。

石川雅望と鈴木朗（つゞき）

三浦千春

○きんち　千春云（きんちといふことを、とめの巻、又、大和物語にも見へたり）
雅望云。これは物語ぶみに見えし詞にて、汝といへることなりと、抄に見ゆ、されど、いかなることにて、きんちといへるにや、たしかに記し付けたる物を見ず、今考ふるに、もしくは、きんだちをつづめて、きんちといひたるにや、とれもふはひかことならんか。
朗云。きみむち（なむち）（のむち）にてもあるべし、又、きみち（[illegible]）にてもあるべし、古歌にまろがちといふことあり、オヲガダンナといふことなり、きんだちはまことにひがことなるべし。
○太宰子の獨語に、仲麿が、明州にてよみたりといふ、あをうなばらの歌は、盛唐の佳鏡にて、李太白が峨眉山月の詩と同格なるべし。定家卿、あまの原とあらためられしは口をし云々とあり。
雅望云。考るに、あをうなばらの歌とは、土佐日記に、青海原ふりさけ見れば春日なる、といふをとりていへるにや。されど古今集羇旅部に、あまのはらとあれば、定家卿の改められしにはあらず、百人一首に、あまのはらとあるより、定家卿のあらためられしと思ひて、古今集を忘れられしはあやし。
朗云。うひまなびの説よし。
○鞴（フキガハ）
雅望云。和名抄に、唐韻を引て、鞴は韋嚢吹火也、とありて、和名布岐加波、としるされたり。今ふいごとよぶは、ふきがはをよこなまりたるなり。

又鋸も、和名能保岐利とあり。今はのこぎりとぞいふなる。木天蓼を、和名和太々非と訓せり、今はまたゝびと、をしなべていへり。かゝる類多くあるべし。

朗云。京都にて、革堂を、コオドオといふかでとく、ふいでも、ふいでれなるべし。夕皃 、ユフゴといふ類なり。

○なるべし。（徂來作）といへる書に、入唐といふことは、昔の博士のいかゝ心得たるにか、日本を夷に爲たる詞なり、とあり。

雅望云。此こといかゝあらむ。入といふ文字を用ひたりとて、唐土を内とし、我國を外とすともいひがたかるべし、歴史に、戎夷の地にゆくを、入と書たる所も、あまた見えたり。遜迹か詩題にも、觀ニ永樂公主入 蕃、とさへかきたるをや。この翁、さる心より、孔夫子の贊に、みづから日本國夷人とは、いかでかゝれけむ。

朗云。此論いとよし。

○同書に、火の用心と云は、火あやふしといふ事也、本朝文粋に見ゆ。拍子木も、火あやふし木なり、としるす。

雅望考るに。時をしらせ、あるは火あやふしなど、ふれありくに、木をうちてめぐるは、後の世のさまにて、いにしへにさることなし。拍子木は拍板などの、拍と同じことにて、釋名に拍搏也、とあるこれなり。源氏挾衣に、はうしとりてとあるも、拍子の音なり。後世木を二ツあはせてうつを、拍子木といふべきを、横なまりて、ひやうしぎとはいふなり。ひあやふしぎといへるは、附會の説ならんか。

朗云。源氏物語に、つるうちしつゝ、火あやうし、といふことあり。

○俗文のあやまり。

雅望云。今の世の俗文に、御座候といふ文字を、あまた用ひてかくことにす。御座はおはしますといふ訓なれど人をあがめいはんにはさも有るべし。おのれがことをいふにもこれを用ひて、不佞儀も病氣にて御座候、などかくことあるまじき、ひがことの限りなるべし、

朗云。これは俗文の俗文たる所なり。かゝる轉訛を、俗文にとがめど、限りあるべからず。

○をぢをば

雅望云。伯父叔父は、をぢ、姑姉姑妹は、をばにて、父の兄弟姉妹なり。母の兄弟は舅の字なり。母の姉妹は姨の字なり。母方のをぢをばなり。母かたのをぢに、伯父叔父などかくはたがへり。本妻を嫡といふゆゑに、本妻の生る子を、嫡子といふ。二郎三郎にても、本妻の子は嫡子といふべし。太郎をのみ、嫡子と思ふはひがことなり。息女とは、おのが女をさしていふ詞なるを、人の娘をさして、御息女といへるも、わろし。

朗云。俗字俗談共にとがむるに及はず。只其まゝにてあるべし。万の事、轉變轉訛あるは、世中の常なり、是を一々に咎むるは、扇は風を生ずるうつはにてこそあれ、物をのせてさし出し、或は日影にかざし、面をかくし、拍子をとり、しつへいの代りにするなど、皆あやまりなりといはんか如し、源氏物語に、御息子の君達、とあるは如何。（こは御息女のここに對していへるなり）

猿

安藤紫光

水に浮べる月をとらんとするを見て、猿を笑ふことを勿れ。食の爲によく舞ふをもて、猿をあざけることを勿れ。人も亦、さる類ならじやは。人は徒に、心の中に畫きたる妄想の影をおひ、胸にうつる幻の姿をたづねて、手をのべ、足を動して、之を求めむとするなり、人は只はかなき名譽と、うきたる黄金とを得む爲に、心にもなく、あるは笑ひ、あるは怒りて、勤むるなり。あはれ、おのが身を知らで、猿を笑ふおろかさよ。

世の人は、そのさまのむくつけしとて、猿をおとしめ、その姿のきたなげなりとて、猿をいやしめど、なかなかなりや。この世は、只上べのみの世ぞ。花やかに、きらびやかに見ゆる、それ何ものぞ。かしこげに、優れざまにおぼゆるも、それ只かざれるものぞ。錦の裏は美しからず。浮世の裏は、なべてけがれたり。なかなかに、かざらぬ猿のさまぞゆかしき。

猿のかしこさこそ、げに人にはおとりたらめ。されどその身の程は、人にまさりて、いと心安げなり。春は峯の霞の中に、朝日の影をむかへ、秋は谷の紅葉の下に、夕日の影をおくる。あつければ、涼しき清水に身を滌ぎて、夏を忘れ、寒ければ、繁き木の間に身をよせて、冬を凌ぎ、美しき衣着て、人にはこらむとにもあらず。榮譽を求めて、世に時めかむとにもあらず。饑うれば、木の實をあさり、飽けば、木の間にたはむる。おのがまゝに行ふ心安さは、げに極りなかるべし。さるからに、亂れたる世の人は、山の奥などに、世を遁れけむかし。

されど。人は、事業をなすべく、この世に生れいでたるなり、徒に世を遁れ、山にかくれてあらむは、天つ神の御心にもたがひぬべし。心安しとて、猿にならひなむには、猿に笑はれやせむ。けがれたる世ならむには、みづから、その木鐸となりて、之を清めむこそ、人のつとめなるべけれ。

あはれ世の人よおのれ猿を笑ひつゝ、おのれ水中の月を捕へむとする勿れ。おのれ猿をあざけりつゝ、おのれ榮譽の爲に人に諂ふ勿れ。おのが心のきたなさ、おのが心のむくつけさを悟らで、猥に猿をおとしむること勿れ。徒に、猿をいやしむること勿れ。又おのれ天つ神よりうけ得たるつとめを忘れて、猿の心安さを慕ふこと勿れ。さる人はこの大御代にはあらざむめれど。

おきの玉藻（十）

永石徳文

過と不及

世間の事に過と不及とは、諸人のうへに有事也。居宅よく造りて、家財はすくなく、衣類はよくして、力はあしく、先祖の作善をも略して、子供の寵愛には物を入、朝夕の食事には奢りて、人を馳走せざるものあり。大過と不及のなきやうに、氣をつけて常に暮すべし。（子孫寶草）

いさゝかの事のやうなれども、心せずも腹わた見ゑすきて、いやしめらるゝにいたりぬべし。親にはさのみ心もつけずして、わがつまこには、きらきらしきまでにするものもあめり。男も女も心すべきなり。

かりもの、心がまへ

有書にいはく、人の物をかりてそんじ、やぶれたるまゝかへすべからず。もしそんじたるをば、よくおぎなひてかへすべし。借ては恩なり。恩を受しもの、恩をやぶるは野鹿の草をそんずるが如し。放逸成者は、わが物をば大切にし、人のかり物をばすて置そんずるをも、くるしまず。又わが物のやうにして、又人にかし、或はをそくかへし、又先よりさいそくなければ、わが物にせんと思ひ、さいそくあれば、その使に持せてかへし、又はその内うしなひてかへさぬやからも有もの也。しかもかやうの人、これにもはぢず、無遠慮にものをかるものなり。江錄といひし人は書籍をかりても、大切に見てさきよりもよく拵てかへせしゆゑ、誰人もをしまざりしとなり。（仝上）

恩を施して思はず

人に恩をする時に、その返報を思ふ事なかれ。恩をば其者にくれすつる心にてすべし。恩をせし時その者恩を忘れずして、返報あらんとおもふ故、もしなき時はいかりつゝ、益なき恩をもしけるものかなと、かへす／＼口惜く思ふもの也。返報を思ふは、誠の恩にて有べからず、人に恩をかすといふなるべし。（同上）

わが心にあはれなりとおぼえて、さて施したるものなれば返報をもとむべきにはあらされども、世に心せばき人はなしとはいふべからず。恩をばほどこしてはつとめて忘るべく、恩をうけてはつゆも忘るべからずといふ心をいへるなり。彼の人にはしかじかの恩をかけたり、云々のものをめぐめども、いさゝかも返報せずなどさかなき人はいふめ

り。賤しむべき心柄なり。慎むべし。

忍耐

唐に韓信といふ智勇をかねたる兵あり。たけ高くして大也。長き刀をさして道を行しに、馬鹿もの出會いふ樣は汝其太刀ぬくべきや、ぬく事ならずは、わがまたくゞりてとほれといふ。韓信是を手にたらさると見て、股をくゞりて通りたり。後は漢の高祖の臣下となり、一天に名をあげしと也。かやうの人は大勇にして、勇をかくし、進退途にわたる也。今の世の人はすゝむべき事にはしりぞき、退くべき事にはすゝみ、耻まじき事にははぢて、はずべき事にははぢず。天地雲泥のちがひ也。大事を思ひたゝん人は壹人のまたをくゞる事をよくこらへて、萬人の肩をこすむかりのことをすべし。（同上）

かならず人のまたをくゞりたるかよしといふにはあらず。小事を忍びざれば大謀を亂るといへる心なり。とるにたらざるものを相手とすれば、己の格も下るなり。ありがちのことなり。

後悔はさきにたゝず

少年は老やすく、學は成がたし、一寸の光陰をもかろく思ひてつひやすべからず。過しあとのはかなきは是非なし。行末に心をつくすべし。ながれみなもとへかへらず。後悔先に立事なし。歌に、

さきだゝぬくひのやちたびかなしきは
ながるゝ水の歸りこぬなり（同上）

しみのすみか

石榑千亦

われこの頃、石川六樹園のしみのすみか物語をよむ。滑稽の筆、諧謔の口、思はず頤をはづすが如き中に、したゝかにふくめたる諷諭の意、なほ蜜の針に似たるものあり。されどあまりにざれたるは、親の目にふれ、子の耳に入れむもさすがなれど、こゝには、たゞさらぬ限、二三章をぬきいでて、一は輕妙の筆、人の意表にいづるものあるを知らしめ、一は未だ見たまはぬ諸孃が、消閑の栞となさんとす。

(い)美濃國の老夫婦わかがへる事

美濃國に老いたる夫婦ありけり。ともに七十にあまれり。日毎に山にのぼりて、薪をとりて、なりはひとしける。一日翁山にゆきて、日くらしかへりこねど、嫗心もとながりて、門にたちてまちつけゐたるに、戌すぐる比、翁薪になひて歸り來ぬ。いかにおそかりつると、紙燭とりてむかひ見るに、おもひかけず、翁かはたち二十はかりの若人になりて、髮もつやゝかに、むかしのごとなりにたり。さてもいかなることありて、かゝりしとゝへど、翁いへらく、はじめ山に入りて、薪こりてゐるとき、みなれぬ鳥を見つけて、追ひもてゆくに、例の山ともればゐぬ所に出づ。そこにきよげにながるる泉あり。のんど渇きぬれど、むすびてのむに、よく醸したる酒にたがはず。心ゆくどかりのみけるまゝ、しきりに醉をもよほして、やがてそこにたふれふしぬ。塒もとむる鳥ども、きなくに驚きて、めざめて急ぎ走りかへりぬといふ。隣なる人もとひきて、大かたあざみいはざる者なし。あしたになりて、姥われもゆきて、

かの泉汲みてのまヽしとふい。うべなり、とくゆきはとて、よく道を敎て、いだしたてヽやりぬ。かくて其の日もくれぬれど、うど歸り來ず。初夜もすぎにたれど、見えこず。夜一夜。もねられねど、鳥とともに起て、ゆくへもとむとて、急ぎゆく。心もとなきことかぎりなし。されど去りたる道なれど、朝霧のまよひもたどらず、やう〳〵かしこにいたりぬ。泉のわたりを見れど、人もなし。狼などにやくはれけむ。我身こそ若がへりたれ、年比の女を失ひては、いかにせましとなきいざちて、仆れふしけるが、ちひさき岩はのかげに、物ありと見て、ちかづきて見れど、うまれ出て、月ばかり經ぬるとればゆるわか子の、さやかなる聲してなきをり。よく見れど、うむか着馴つる衣の中に、もこよひてわれど、かきいだきて、うどかと問へど、なきつヽうなづく。やがてふところに入れて、やどりにかへり、乳をもらひて、養ひそだてけるとぞ。あまりに泉をむさぼりて、いたくのみすごしけるあやまちなりとぞ、かたりつたへたる。

物うらやみはすまじきものなり。甲はかヽり、乙はなど、見るもの、きくものにつけて、かにかくと思ひわづらひ、ろをまねむとして、及ばぬよりもといひけむまで過して、悔の八千度かへらぬ繰言するが多し。今この老嫗は、老翁の若がへりたるを見て、羨しさに堪へず、敎へられつるまヽにむさぼり、愈若がへらむとして、遂にあらぬわらぬわかごにまでなりかへりて、もらひ乳に育てられつる、あるべからぬことも、あるかのやうにればねて、無限の味あり。おもしろしともをかしとも。

(ろ)餅を買ひて捨兒を拾ふ男の事

ある人大佛殿ををがみてかへさに、あたりなるあき人の家に立よりて、いへづとにもちひかはゞやとて見るに、いとさゝやかなりけれど、いかでこのもちひ尋常にも似ず、あさましくつくりしぞといへど、あき人この餅ちひさからず。さかの給ふは、一でう大佛殿を拜み給へるなるべし。かの大きなるみ佛を、拜し給へるめうつしには、よろづのものみなさゝやかにこそ見ゆれどいへど、げにさることもあるべしとて、餅を懷にいれて、一二町あゆみゆきける道の傍に、かぶろなるみどりこの人のすてたるにや、すゞろに眠りゐたるを見て、あないとほし、母にそひ寐の夢見るにこそと、あはれがりてかきいだきて、また四五町斗あゆみけるが、あまりにおもくて、こうじにたれど、さどしいてはむとて、かきおろして、顔をまもり見れど、老たるかたゐの尼にてありけるとぞ。

大佛殿をがみての歸さ、餅を少さしといひ、老いたる乞食をかぶろのみどり子と見て、かき抱きなどしたる、大きなるものを、大きなりといはずして、背面よりうつして、それとしらしめ、大きなるものに目うつりしたる後の失策話、いと興あり。かの偉なり大なりと、頻にいひのゝしり給へる、洋行がへりのさかしき君達に、見せ奉りては。

(は)宮司と法師闘諍に及べる事

昔某の國の山寺に、手をよくかく法師ありけり。あたり近き人の子どもは、皆かしこにゆきて、手習ふことをぞしける。同所に、宮司にて、ゑせ歌などよむ者ありけり。一日法師許ゆきけるに、弟子にかきてやる本に、桶といふ文字のかながきに、はしのをにて、をけとかきたるを見て、宮司あざわらひて、

御坊には、かんなのつかひざまを、まだしらせ給はぬにや、桶はおくのおを用ひ候がならひなり。但小桶といはむ時のみ、はしのをを用ひて、書くなる。此の本に見えたるは、常の桶なれど、おけとこそ書給ふべけれ。さしもふみの道心得たまへる御坊なれど、この國の事は、うと〱しくおはしにけりといへど、法師はもとよりさる山寺に生ひ立ちて、かたくなに、むくつけき人なりけれど、腹だちて、これ更にあやまりならず。わぬし、順ぬしの和名抄を見ずや、まさしく乎計とかきてあり。法師はさる證據につきて、かきたれどひがことならず。そこのたまへる、小桶の時にのみ、をけとかゝむこそ、なか〱あやしく、しれがましき人の心地はすれといへど、宮司も大いにいかりて、しれがましとは、わ僧のことよ。およろかみつ代の言葉は、某等こそわきまへたれ、遠き異國の教を守るものゝ、しるべきにあらずとて、さま〲あしざまなることを、いひつゞけゝれど、法師もをさめぬ筋にて、念珠もて、宮司がつらをしたたかにうちけれど、宮司は扇をあげて、法師がかうべわるゝばかりにうちつ。さて引組みて、上下になりて、をどりあひたるを、むらのをさ聞きつけて、ひきわけなだむれども、かたみに腹だちて、うけひかず。法師も宮司も、顔頭をいはず、大なる柑子うちつけたらむやうに、はれあがりぬ。さながらやむべきならねど、いかにもあれ、國司の御前に出て、ことのこゝろあきらめ申すべしとて、いたきを念じて、申し文もちて、廳にいでぬ。守大にいかりて、凡宮司はきよくあかき心をもち、いみきよまはりて、神につかうまつるこそ道なれ。法師は柔和をもて人を導き、後の世の事などときしらすべきを、おのれ等

まけじ心のつよく、いさかひうちあひて、斑をさへ蒙りぬること、あづ山がつにはおとりたる心なるはや。よしあしをいはず、其の職をめしはなち、遠く逐ひやらふべけれども、上のおほん惠ふかくおはして、罪人のいでくることを、御身にかへ歎かせおはしませど、この度のとがは許しつ。おのれらがいさかひのはじめは、桶といふ字の假字より、事おこりぬ。これわがことわるべき事ならねど、またも訴事のおこらざんなるために、教へしらすなり。假字遣ひのことしるせる書に、おけ、こをけとかきたるは、木もてつくれる桶のことにはあらず。かけまくもかしこけれど、顯宗天皇、仁賢天皇ときこえ奉れるは、御兄弟におはしまして、兄の皇子は億計、弟みこは弘計と申奉りし。この御名ともに、おけ、をけにて、まぎれやすければ、假字のことたがへじとて、弟皇子を、かりに、こをけとしるしつけて、假字遣の書に、かきとゞめ置きてしを、後の人は日本紀をだにえよまざれど、先達の心用ひもいたづらになりて、おけ、こをけは水入るゝ器ぞと、心得あやまちけるなり。又桶の假字は、順朝臣の書に、乎計と書かれたれど、それによるべき理ながら、後の世となりて、歌の道にもたてたる其の筋の色々あれど、おのおの師にしたがひて、教のまゝにかゝんことは、さもあるべし。ともあれかくもあれ、やくなき物あらがひし、さまにも似ざる鬪諍に及びぬること、奇怪なりとて、しかりて廳の外におひやりぬ。宮司も法師も、二たびいひいでむ詞もなくて、こぶのいゆるほど、五十日ばかり、かどをさしこもりをりけるとかや。

かゝる法師、かゝる宮司、今の世にもなほありやなしやしらず。爪垢ばかりの學をおさめて、學者

顔したる。耳糞斗の行をほこりて、道徳者顔したる。いつの世にもつきぬものか、詩人ならぬ詩人、歌人ならぬ歌人の輩出、きくもいやぞかし。口の端にかくるも耻かしき、末の末の少さき問題にかゝつらひて、其の身を忘れ、時と金とを費し、得る所果して幾何ぞ。思ひても又思ふべきなり。ろの人々の詞によりて、法師は法師、宮司は宮司、國司は國司と、其の身のほどをはかりしらしむ、作者苦心のところならむ。さるにても、益なき物爭ひはすまじきものにこそ。

(未完)

走水と吾妻山と

鼓山散史

余は先つ頃、鎌倉懐古錄なる一篇をよせて、諸嬢達の一讀を乞ひたり。今また、鎌倉より程遠からぬ横須賀近傍に、古き書にいちじるき橘姫の古跡あり、文まなぶ嬢達には、少しは益ならんかと思ひ、道しるべを寄せ、併せて學の園の助けとなさんとす。若し避暑の遊を鎌倉逗子になす嬢達あらば、一度訪ひたまへ、横須賀軍港を過ぎて海濱に沿ひ、岸打つ波に耳を洗ひ、上、總、房州の翠なる山々を眺めつつ半里ばかり行けば、大津村なる一漁村に達すべし。海廣くして漁る小舟の彼處此處に網を引き、汀には波靜にして鷗の沙上に眠るさま、松蔭に憩ひて之を望めは、何れの時か夏なるらん、身に涼しき松風は、天女か秋思の琴をや彈ずる想あらしむ。大津村に大津館とて一の旅舍あり、海水浴にて名高し、一浴して快を取るもまた一の興あるべし。大津村より更に半里を行けば馬堀の里なり。余が共に遊びし友は、此あたりの地理故事に詳しき人にて。余に告て云ふ、

此の左方の村を高雄村となん名づく、有名なる妓女三代高雄は此の村に生れたり、故に村の名となせりと。高雄の生れし家は、今に現存すと告ぐ。余は物好のあまり、友人と往て訪はゞやとて、連立ちて其の家にいたる、一茅屋の田舍家にて、別に高雄の舊記を藏せるものもなしと答ふ。高雄は一の賤しき妓女なれども、今に至るまで村名にさへ傳へらるを見れど、高雄は徒らに容色の艶なりしのみにもあらず、他に優れたる心はへのありしなるべしなど、友人と語らひて去れり。右すれど浦賀町に出づ、左すれど一の切通なり、之を過ぐれど走水村なり。古書を讀みし嬢達は知りぬべし、日本武尊が、東北の醜を征伐せられしとき、相模より航して上總に到らんとす云々。とあるは、げに此走水にて、走水の村名は、古書にも書記して今と同名なり。走水は一漁村に過ぎず。日本武尊の舊蹟を土地の故老に尋ねたれども、一も存ずるものなしと云ふ。左れども、海に航して上總に到らんとして舟装せしは、此地なる明なるべし。尊の妃橘姫が、尊の船を助を参らせんとて、海に入られしも、此の海のことなるべし。白波茫として古に變らぬ海原なれども、尊の航せしところ、妃が夫君の爲に、身を献ぜし誠と思ひ出でゝ、何となく海風の悲しきを感じたりき、後尊が、碓氷峠にて、吾嬬と歎ぜられしも、左ころと思ひ、讀みなれし古書を讀むだに、事の新なる樣なるは、古跡を弔ふの益なるべし。

走水の海邊を沿ひて、元來し道に歸り、横須賀町に來る鎭守府なる裏手に吾妻山となん呼ぶ山あり、橘姫のなきがらを祀れる所なりとき、舟をやとひて、社に詣づ、社は山のいたゞきにありて、古く神さび

て夏木立茂れる中に安置す。土人は傳へて云ふ、姫の亡体の此の山邊の濱に漂着せし時、半身を失ひて、下體のみなるを葬り祀れりと。故に婦人躰下の病に苦しむものは、社に禱りて平愈を得ると云ふ。東京に吾妻森と稱する所あり、此もまた、橘姫の亡体を祀れりと傳ふれども、地理より見、かつは走水の地勢、海の有樣を察すれども、此の地の吾妻山こそ、眞に近けれ。本誌にもかつて橘姫の傳記を載られたる事なれど、彼此思ひ合して、孃達が文讀む便にもならんかど、あらましを記し、此處に遊びん人の栞となす。

深山の奥

（一）高嶺

ちまた

わが國には、夏のあつき日、高き山にのぼり山祇の神に詣づる慣ひあり、こは、一つには、わが神國の手ぶりにもかなひ、一つには、身体を健やかならしめむとするによりて、自らかくなれるにやあらむ。おのれもそれにならふとにはあらねど、暑しとてはかへも出でず、たゞ伏して見、居て見、わが身一つのおき所なく、心地例ならずなりゆかむとするに、ふとおもひたちて、伊豫の高嶺にものしぬ。つゞら折なる坂路、いと險しくいと遙かなるに、今は歸らむ〳〵と、幾多たびおもふ物から、思ひたちて出しを徒らに歸りゆかむ、人のさがなきさだめも口をしからましと、念じてのぼり〳〵ぬ。そは岩のはざまよりわきいづる清水、こもりかに生ひ茂りたる大木の陰に助けられ、また白き衣きたる道者とやらむいふが、いと數多ゆくに從ひて、負けじ魂にたすけ

られつるなりけり。やう／＼嶺にのぼり、まづ宮居ふし拜みて臨み見れど、岩石のほかには木の一つ木も生ひしおとなく、草のかき葉も見えず、鳥の翼も及ばざるらむ、こゝには鳴く音きこえず、獸の脚も堪へざるらむ、こゝには臥處とればしき方もなし、雲は遙かに麓のかたをゆきかひ、雷は遠く谷の方にひゞくめり、太空を磨すらむと見し道すがらの木々は、わづかに野邊の若草などのごとく見ゆるなど、とりたてゝいはゞめづらしきふしいと多からむ、まして伊豫、讃岐、阿波、土佐の四國のはて／＼はいふも更なり、靑々と遙けき波路隔てゝ、中國九州の島島など見わたさるゝをや。かゝれど心もすみわたりて、塵ばかりの曇もなく、風は汗ばみたる膚にしみわたりて、まだきに冬のたちけむと疑はる。さるにても靑葉は萎れて風を起さず、草の色は赤くなりて風をやどすべくもあらず、みな口々に暑し／＼とうめきゐるらむ、わか鄕里やいかならむ、かゝるべしとは夢にもしらじな、さぞれ親兄弟の思はむこともいかゞなれど、用なき身は歸るにも及ばじ、しばらくはと宮守の男に乞ひてとゞまり、この淸き天地に俯しつ仰ぎつ、さきに來し道のくるしかりしこと、夏のあつきことを忘れしのみならず、父母の許に歸るをも打忘れ、遂に又ゐしらずなりぬ、そも／＼わが身はこれ人なるか、將、仙なるかを。

（二）冠瀑

千足山は高嶺につゞきたる山なり、この山に瀑布あり、冠瀑といふ。其の水きよく、落ちたきつ音百千の雷の一時におちかゝりたらむが如く、岩にくだくる水のはげしさいはむかたなし。登らむとするに暑さはたとへむにものなく、坂路はいよ／＼こゞしく

なりゆけど、暫しのぼりては大木の蔭に息ひ、漸うあへぎ〳〵其の山にたどりつきて、人にみちびかれてゆくに、樹々をとほして、きこゆる音まづうれしく、つかれたる足ふみしめつゝ從ひゆけど、さながら大空よりひたおとしにおとしたらむ水の如く、高さ千三百尺ばかり、巾三百尺斗ありて聞きしにもまさりたり。打あふぎ見つゝ思はず手をうちて、あはれ塵ばかりもにごりなきは、わが身の利など思ひもよらぬ淸き武夫の心にもたぐへつべし、ひゞきていさましきは、名きこえたる勇すら男が一時に大砲はなちて敵の陣にむかひたらむにもたぐへつべし、岩にくだけてはげしきは、天皇のため皇國のために、家も身も打わすれてたけびたらむ猛男にもたぐへつべし、など思ひつゞくるほどに、風は身にしみわたりて、夏はいつしか逃け行きたらむやうなり。おのれ未だ華嚴、霧降の瀧を見ざれど、とかくの評すべくもあらねど、この瀧にして帝都を去ること、わが鄕を隔てたらむほどにあらしめましかど、人のめではやさむこと華嚴、霧降の上にあらむとも下にはあらじ。さるにても冠といふ名よ、いかなる故由ありておはせたりけむ、水きよからむ纓を洗ひつべしといふよりおこれるか、はた又四國をかけてことに高く大きなるよりおほせたるか、はじめのならむ濁りに濁りたる今の世の垢をも洗はまほしく、つぎのならむ四國かけてのみならで、日本の國かけて高く大きなる名となさまほしく、何れにしても其のあたり近く生れたるおのれだにのぼりがてなる地、はた二たびとえのぼるまじかりなむ地なるは、返々も口をしき限なり。かゝるめでたき瀑なるをいかにもして帝都ちかき地に出さまほし、あはれこの冠瀑よ、な

ど思ひつゝ歸りて、其夜は其の山里にやどりけれど、夜ふけて白き髪白き髭の翁の白き衣きたるがあひて、われはこのわたりにすめるものなり、汝はわれを世に出させまほしく、はた名を得させまほしく思ふとか、いと厭はしきことぞ、われは濁りに染める浮世の垢あらはせまほしくもあらず、はた日本かけての名得まくもほりせず、といと尊げにいふよと思へど、つかれはてたる轉寢の夢のさめたるなりけり。さてはこの瀑はけ高き心よりかゝふれる名にやと思ひなりて耳傾くれど、遥にきこゆる瀧の音いときよくすが〳〵し。

東京廿四景（四）

菊の屋女史

隅田堤

わが思ふ人はありやなしやと、昔男が鳥にことゝひて、舟をこぞり泣かしめたるわたりは、何處なりけむ。ゆく水も、游ぶ水鳥も、かげゆかしげなる隅田川の流れに沿へる隅田の堤、これや、げに、ゆかしき都の名所ならむ。

十里の長堤、うらゝかに吹きわたる春風に、きほひ綻びて、ほの〴〵と咲きつゞきたる花のあした、はなやかさは、げに、紅になびく雲も霞も、何に似るべきけしきかは。

梅見祠畔の春のくれ、ふきまく花の夕風に、誰があとをとふならむ、あはれに響く遠寺の鐘の音も、ましろになびくぞかりに見えたる、身にしむいろの限りやな。

川ぞへの里は、薄く濃く立ちなびく朝霧のかくれに、漕ぐ舟は見えずて、白帆のみ、三ッ四ッ二ッ、ふく

風になびきたるあなたには、遠く高く、空なる富士



の峯を遥にふりさけ見、峯には近く朝開き漕ぎ出る

舟子の謠しづかにきこえ、うきねの夢の露やはらふ、あしべの鳥のはねかくかげ、あざやかに見えたる秋のあしたのけしきには、げに、たゝずめど、われも畫中の人の心地ぞする。

月のみふねもすみわたり、岸うつ波は玉とちる隅田川原の秋の夕、一葉の舟に棹して、水のながれにまかせむ、いつか天にものぼらむ心地ぞする。

三囲の社、牛の御前、白鬚の森、それも、いづれ一わたりの見所なれど、春は梅の百花園、秋は七草の百花園、つくりもひろき八洲園、これも、いづれ、をりふしのながめなるべく。げにゆかしくおもしろきは、隅田堤のけしき。言問ひの團子、長明寺の櫻餅、隅田川の蜆かへるさのつともおもしろからむ。

朴平　第二

白魚女史

朴平は何思ひけむ、すご〳〵と佛間に立ち入り、まぢし燒香したるが、やがて、壇なる位牌、うや〳〵しくさゝげ持ち出でたるが、文雄の書机の上に押し据ゑたれど、文雄はあやしげにうち見て、こは何するぞ、朴平。そちが樣子唯ならず、氣や狂ひたらむ、心を靜めよと制すれど、朴平は、いかで、氣も魂も狂ひは仕らじといひつゝ、のう若君、朴平が申す言ときゝたまへぞこそ、何事も、み心にれちさせ給ふまじ。こをみろなはせ。御父上母君をなむ、れん忘れは侍るまじ。れん父君の折りは稚くて、さぞかりは、れん覺ねも、ふかくはあらせられざめれど、母御前のれんことは、わづかに三歲の昔、忘れさせ給ふきはにもあらず。ればねさせ給はぬ ほどにもあらず。母御前のれんいまは、若君に何と仰せ殘し給ひしぞ。朴平がけふの御ねがひ、必ず朴平が獨りの願ひとは思ひ侍らず。其の折り、れん身は何とれんいらへあらせられしか。母御前のれん手にすがり給ひて、何と仰せはありたまひしぞ。母御前は何を賴みに、うちゑまれつゝ逝きたまひしか。れん忘れはあらせられまじ。れん形、れん姿こそ變りたれ。母御前父君、が、かくこそ此の世には在しまし給ふなれ。朴平が願ひ仕らずとも、親御前の御前には、ればしめす事なくては叶はずこそ候なれ。さるを、かく御書齋に籠り居給ひては、朴平は願ひきかれずとも、そは恨みは侍らねど、なき御兩親、わきても母御前のれん恨みは、必ずや深くぞ候はん。勿体なき言ながら、亡きのちの御孝養は、いづくにいかにして、盡くし給ふ御心におはすかと、一言は一言に誠あり、一句


松亭



は一句に理ある言葉。文雄のかたくななる心は、岩のごとなれど、大山も啻ならぬ親の恩には、思へど、爭ふべうもあらず。もと書癖といふ偏屈にうちつゝまれたれど、孝といひ義といふほどの直ぐなる道は、心の奥に備へたる男なり。朴平が最期の心勞、孝養の一言には、文雄の岩も微塵に碎けたりけむ、俄に書物をしたゝみて、朴平、けふはこれより菩提所にまゐりなむ、車の用意たのむぞといひつゝ、位牌を手に、佛間に入りたり。

たまさかの他出にて、車といひ、菩提所といひ、朴平がこゝろには、おもしろからねど、文雄がかくいふは、まげにまげての事なれど、しばしにても書齋を出づるやう成りしを、せめての甲斐ありとおもひて、强ては爭はず。車整へて立ち歸れど、文雄は、庭前の櫻一枝二枝、手むけの花にと、折り取りてあり。

朴平はふと思ひ出でしごと、横手をうち、あな若どの、けふは兼々狩野先生より御招待狀が參り居り候。競舟の日にては候はずや。御菩提寺の途なれど、是非に御見物に寄らせ給へ。今を盛りの花の下、花のごとき大和男兒が、落花と共にうちつれて、流水に舟を競ふとあれど、さだめてながら、花のながめも、こよなく限りにや候はむ。御立寄ありて、是非に御物語り待ちはべるといへど、文雄はうちうなづき、櫻を手にしつゝ、車を催し立てゝ、立ち出でたり。

朴平は、しばし入るともなく、出るともせず、動きもやらで、門口に立ちながめたりしが、やがて、しづかに内に入り、文雄が書齋、みぢんに散りたる花瓶を拾ひあつめ、さん〴〵に濡れ汚れたる毛糸の花瓶敷、何故かおはたゝしげに取りあげ、書物といへど、紙屑はかりの物も、大切にせらるゝに、むざん

な、あたら花瓶を。しかも、花瓶敷、百代さまがいかい丹誠せられて、はるばると送られたる花瓶敷を、かうむごたらしう水に濡して。……百代さま、百代さま、百代さまも、さぞ待ちわびてれはさむ。とくも迎へたまへどよきものを。若さまの、いづくまでかたくるしき事やと、獨言ちつゝ、らちもなく亂れたる書を、彼是と取りかたづけ、床を清よめ、懸物を改め、花瓶を新にして、しなやかなる柳の枝、こぼれかゝる櫻の枝、一枝二枝、めとまる限りを、わざといけれども、文雄の心の、もしや露の色にも慰む事もやとおもふ一片の心勞。世の中には、たわれたるをとゞめんとのなげきのみなるに、朴平のは、かたくなをたわやかにせんずる心痛。又世の常の知らざるなげきなめり。

文雄が菩提所は、向島の奧。競舟の場所は、長命寺のほとりなれど、途中なり。春野もあるなれど、必ずや立ち寄らむ。立ち寄らで、春野の主も、兼て知りたれど、必ずやよきに計らひ給はむ。けふ一日は、書齋の毒氣にふれであらでと、書を毒とは、朴平も無理かは、世の中は遂に理のみもてはいひ盡くされぬものぞ。

あはれ朴平、けふ一日はと悦びて、獨りいそいそと、書齋の粧飾、いまだ爲しもはてぬに、むざむなる哉。玄關にひゞく車聲。あはやとおもへど、文雄は既に立ち歸りぬ。その儘、机の前に向ひたり。けさかけて、幾辛勞、幾愁歎、やうやくに愁眉を開かんとおもへど、わづかに三時が間に過ぎず。朴平もあきれはてゝ、言の葉もなく、文雄の顏をうちまもりしも、道理りや。

文雄は、靜かに書齋をうちわたして、朴平、よくも

かたかり清らに美しうしたるぞ。心地よや。書も一入おもしろからむ。墓にも詣でゝ、日來の不孝もわび來りしぞ。朴平、舟も見て來たり。春野は狂氣のやうにて、話にならじと、うち笑ひて、やよ、朴平。そちはさる遊び見たる事なからむ。春野にも詳しくたのみ置きたれど、今より行きて見よ。車も表に待つらむといへど、朴平いかでかうけひかむ。わどのが見給ふてこそ、おのれも見たる心地もせめ。なに君を置きて、いづくにさるわだしもの見仕らむと云ひつゝ、げに老いては眼さへ力なくなり候と、手もて掃ふ涙。文雄はほゝゑみて、げに父君のむかしは、朴平はよく笑ふぞと仰せられし事をきゝしが、わが代となりてからは、年月と共に、泣きのみ増さりゆく、心よわきは、老の常としいへど、あまりに心よわくなりにける哉。ものおもひの多かる故ならむに、とくわが言にまかして、花にまれ競舟にまれ、まどし心をやりて來よと、頻りに勸むるを、朴平も百度いなみたりしが、俄に思ひかへして、文雄のいふまにま、隅田川を志さして、立ち出でぬ。何の思ふ事のありけむ。

事しあればうれしかなしととき〲に
うごく心ぞひとのまごゝろ　（本居宣長）

動くこそ人のまごゝろうごかずと
いひてほこらふ人はいは木か

文林

夏日　近衛忠煕

蟬のなく端山がくれにのこる日のかげなほあつしみな月のそら

竹風　東久世通禧

露にさへたわみやすきを今年生のたけのわか葉に風わたるなり

夏月　佐々木高行

ひるのまの暑さ流してゆくみづに寫れるつきのかげのすゞしさ

燭影映水　鍋島直大

川の上にきらめく岸のともし火はほたるの遊ぶこゝちこそすれ

山家夏　高崎正風

足びきの山ざとびとも見えりけりなつよけにこぬ年のなければ

避暑　壬生基修

ひぐらしの聲もきこえてふく風をまつのかげこそ涼しかりけり

夕立　島津忠寛

けふも又きて涼みつるはなれやをかへりもあへぬゆふだちのあめ

螢　本多忠貫

風わたる庭のくさ葉にすゞしさを
そへてもゆるはほたるなり鳬

泊梅雨　宮地巌夫

梅雨にふりこめられてとまりぶね
いつ出べくも見えぬころかな

田家梅雨　小出粲

かりてほす垣の大むぎそのまゝに
芽もいでぬべきさみだれの雨

蚊遣火　三輪義方

ゑらかしのみづえを繁み蚊遣火の
けぶり下はふやまかげのやど

夕立　仝

ひを遮ん蔭にとうゑしせをぞの
やぶるむかりも夕だちのふる

田家水鶏　林甕臣

くひな鳴くこゑをしるべに歸るかな
わしのまろやの夕やみのかぜ

樹下納涼　同

わを葉ふく風にしたゝる露ちて
ぬるゝさむけし杉のしたみち

夏月　岡部譲

夕立のすぎにしのちのすゝしさを
わがもの顔にすめるつきかな

橋上納涼　田代晶

きよき瀬の波にぬれてぞ渡りくる
川かせすゞしかぞのたなはし

六十の賀に劔に寄する祝といふことを　鵜谷行

六十なる坂はこゆれど大刀の緒の
長きれきなをなはいのるかな

夕水雞　安齋篤敬

まつ人のたゝく音かと出て見れど
かどもる月にくひな鳴くなり

清風入管絃　木庭芳香

いと竹のしらべの聲にすみよしの
松吹くかせやかよひそむらん

月前郭公　松本操

さ夜ふかくすみたる月の山の端に
かたぶくをしと鳴ほとゝぎす

龜　伊東祐貫

岩ぶちのうき瀬はなれて住む龜は
玉藻がくれによろづ代や經ん

海邊夏月　伊藤順藏

すゞしさにかへさ忘れて夕しほの
さし出の磯のつきを見るかな

首夏　石原均

行きかよふ春と夏とのなかぞらに
ひと聲もらせやまほとゝぎす

樹陰螢　蜂須賀隨子

夏木だちわか葉の露と見えながら
ちりて消ぬやほたるなるらん

夏露　前田朗子

打見ても涼しきものはかぜわたる
池のはちすの露にぞありける

夏雲　柳原愛子

山はみなふもとになりぬゆふ立の
くものなしたる峯たかくして

湊川懷古　税所敦子

澄かへる御代にあひてもみなと川
かへらぬ波のこゑぞかなしき

橋螢　下田歌子

わが門のまへのたなはし夕ざれば
はたるれふ子ぞまつ渡りける

池蓮　伊東ちせ子

こと更にみどり涼しくなりにけり
夕だちすぎしいけのはちすば

夕郭公　大河内鉦子

夕つきのかげれもしろきわが庭に
うれしく鳴しほとゝぎすかな

曉旅行　小池道子

夜立して憩はまはしくなりぬれど
あさ戸あけたる家なかりけり

水鷄　大谷章子

とふ人もなき柴の戸を夕べゆふべ
くひなばかりぞ叩きなれたる

田上螢　佐藤艶子

みつふたつ飛かふはたる影みゑて
田面をぐらくなりにけるかな

夏懷舊源三位賴政　安東菊子

ぬゑとりをいにし昔やしのぶらん
ゆみはり月になくほとゝぎす

親　久後鈴子

よきにつけ惡きにつけてたらちねの
親のこゝろはまどひぬるかな

子　仝

たらちねのおやの心をこゝろにて
夢わかゝころわれにゆるすな

短夜月　淸水靜子

夏の夜は短かきものと知りながら
月を待つ間のながくもある哉

舟中納涼　清水きく子

すみだ川綾瀬をかけて行くふねの
かたはになびく風のすゞしさ

松下納涼　安齋三代子

松かげの岩根の清水ながれあひて
風をむすべるそでぞすゞしき

初時鳥　仝

九重のくもゐをわたるほとゝぎす
鳴くやさつきの初音なるらん

月あかき夜船にすゞむ　林甕臣

心に、かしこまり、おかぬ限り、船河原より船に乗りぬ。隅田川に月みんとてなりけり。岸を、はなるゝまに／＼涼しさ、ねばおしらず。さをとれど涼しくなりぬ暑き日は

風も船には乗れるなりけり

汗にかはりて、歌はあまりぞ、しぼりいだしにたる。

おしたれてゆれだにもせず柳だに

しらずもあるかこの船の風

あつしあつしあつしな丘はあつかりき

すゞしすゞしも船はすゞしも

友、「うるさし」。とて、苦む。

さて、お茶の水ぞしわたり、漕ぎくだすほど、日入りはてゝ、斷り岸たかう右に左に、打ち登おて、深山木ども、おひしげり、空くらう、蔽ひわたせり。むねうちつぶれて、すゞろに臆さむし。

身にしみて汗つめたくぞればおける

夏なほ寒し船のうへのかせ

月あかう澄みのぼるころ、大河づらに船は、いでた

り。漕ぎちがふ船どものなかに、そのこをとめども、あざれあへりて、艫はなちあげて、うたひのゝしるあり。ことさらびたりや。あなたの船のすだれのうちなる物の音は、岸ふく松のひゞきに通ひて、汚れたる耳を清まさしめたり。月ます〳〵澄みわたり、風いよ〳〵涼し。よせくる波のおとは、暑さのみかは。濁れる心をしもあらひぬ。

身はふねの波にまかせて月きよみ
　こゝろは空に澄みぞのぼれる

かくて、さをとり「夜ふけわたりぬべし」とて、おのれし酒をくらひつれど、家路を、うながしにうながし、つる一たび二たびに、あらずかし。

ゑひしれてかたぶく月をゆめのうちに
　見つゝかへれる波まくらかな

やすくにのやすらけき代にうまれあひて
　やすけくてあればものおもへもなし
かりこものみだれりしるまきくさきし
　をさまれる代はたふさくありけり
すめらぎにかみのよさせる御さしなし
　飽までたべてあるがたのしさ

（本居宣長）

雜報

●皇太子殿下の御撮影　皇太子殿下には、今を去る七八年前、未だ御幼少の折御撮影相成りたる以來今日まで一回も遊ばされず、坊間御年齢相當の御眞影無きにあらねど、是等は皆御幼少の折の御尊容を臆寫したるものゝ由なるが、殿下には曩年近衛大尉に御昇進以來、兎角御不例勝に在せられしが、近時は御健康舊に復させ給ひたれば、此を好機として、御撮影相成ることに定り、豫て御意に叶ふ九段坂の寫眞師鈴木眞一を召させられ、赤坂離宮内の丸山御苑に、新に御寫眞場を設け、午前朝涼の中に御撮影相成りし由なるが、御服装は近衛大尉の御制服に正帽を着け、軍刀佩せ給ひけれど、御威容一入なりとぞ洩れ承はる。尙は此御尊影は勅任親任始め各高等官へ下賜せらるゝ由にて、凡そ大板一萬枚の御用を仰付けられしとぞ。

●小松宮殿下の御謙德　小松宮殿下の仁惠にして謙讓の美德に富ませ給へる事は、夙に世人の知る處なるが、殿下には、前號に記載したる如く、赤十字社支部臨時總會へ御出席の爲め、同妃殿下と共に、曩に北越地方へ御巡遊相成り、去る十五日御歸京の途次、直江津字五智と稱する所の旅館三官樓へ御着泊相成りしが、同樓にては懸る高貴の御方の宿らせ給ふこ

とて、面目此上無きことに思ひ、御間と定まりし室内などは、聊かにても汚れし處ありてはと、疊建具などは一切新調して之を淸め、殊に御便所の如きも新に構へて、装飾には金銀を鏤めて善美を盡しけるが、同夜殿下には件の便所に立せ給ひけるに、かねては金殿玉樓の中に起臥し給ふ御身にも、金銀の光燦爛として目を奪ふばかりなる華美の装飾を見て、怪しみ且驚かせ給て、御隨身の者に御尋ねあれば、殿下の爲に新たに設けたる由を申上げぬ。殿下には如何に思召されけむ、恁る所を汚さんは余りに勿體なしとて、終に他の便所へ移らせ給ひけるにぞ、御附の人々を始め、同樓末々の者に至るまで、右の次第を承り、誰とて殿下の御謙德に感せざるもの無かりきとかや

●皇女富美宮殿下の御參内　皇女富美宮允子内親王殿下には去る二十四年八月十三日の御生誕後、至極御健やかに御成長遊され、本年六歳に渡らせられ、目今麻布市兵衛町の御殿に御住居相成る事なるが、殿下には暑中御機嫌伺ひとして、昨日午前八時三十分、御養育主任林友幸子夫婦御介添ひ申上げ、麻布御殿より馬車にて青山御所へ御參内遊ばさせられ、皇太后陛下に御對顔の上、暑中の御挨拶あらせられしとの事に承はる、記すも畏れ多けれど御髪は、黒き元結もて稚子輪に上させられ、御服裝は紫矢絣の上布に、赤地錦襴の錦の帶を緊はれ、御袴は馬車に隱れて御見受申上げざりき。

●夏季に於ける宮中の御膳部　例年夏季酷暑の候に際しては、宮中に於ても只管御攝生を專一とせられ、時としては侍醫より奏請して、不消化物の御禁食を大膳職へ命ぜらるゝ事なるが、恁る御沙汰に接

しては、大膳職の心勞一方ならず、注意の上にも注意を加へて、魚鳥獸肉を始めとし、野菜中にても膏脂強きもの、又は消化し易からざるものは除きて、自然滋養淡泊のものゝみを調進奉供すれども、尚は萬一を氣遣ひて、御食事後神佛に祈誓して、專念龍体の彌が上にも健全に渡らせられん事を禱る程なりと云ふ。さて本年も最早土用に入り、暑氣亦隨分強くして、九十度以上を超ゆること屢々なれども、幸にして都下を始め、各府縣に於ても惡疫流行の憂ひもなく、殊に　三陛下　諸殿下に於かせられても、玉體愈々御壯健に渡らせらるゝより、侍醫に於ても今に御禁食を奏請せざれど、竹の園生の風清く、大膳職員は平生の如く安らけく、諸品を吟味精撰して御膳部を調進奉供し參らせ居る由に漏れ承はる。陰陽燮和して、聖體千代の松にくらぶ、臣民の幸慶何物か之に過ぎん。(讀賣新聞)

●東京府高等女學校開校及卒業式　兼て數々記し通り、東京府高等女學校は、小松宮御息所殿下より下賜せられたる建物をもとゝし、これに數多の教室を建増し、今般全く落成せしにより、去る十九日神田橋外同校舍に於て、左の順序に從ひ、開校式を執行し、併せて、本年三月卒業の生徒に卒業証書授與式を執行せられたり。

皇后陛下には、右建築落成開校の式執行の趣被聞食金二百圓を下賜せらる。

式場には同校樓上の大講堂を以て充て、其の正面には　天皇皇后兩陛下の御眞影を掲げ奉りて諸般の設備整ひ定刻に至れば、同校の職員淑女無慮五百名を率ゐて式場の正面に整列し、賓客の席定るを待て、先づ御眞影を拜禮し、次で左に掲ぐる開校式の歌、

もろ聲にて麗かに唱へたり。之れは同校が小松宮御息所の御惠みによりて成りたるを喜びしものにて特に開校式の爲め東宮鐵眞呂氏の作られしと聞こえぬ

松のしづくの落ちそひて
學びの庭はひろまりぬ
いろ香ゆかしき姫ゆりも
いよいよますますしげるべし
いはへわがともゝろ聲に
にひむろほぎのけふの日を
うたへわがともゝろこゑに
新室祝ぎの今日の日を

三度くりかへし終れば校長の報告あり、夫より知事來賓(寺田文部參事官)の式辭等あり、軈て卒業證書の授與を終り、君ケ代の唱歌を奏で、御眞影を拜して式の全く終りしは十一時近き比なりしが、當期の卒業生は左の如くなり

辻たけ	三木田ひさ	山內とき
渡邊つが	佐藤みち	平川つね
尾谷くりゑ	藤澤ひろ	武井はつ
濱口くま	西宮りやう	島田るい
山縣しげ	服部なか	齋藤はつ
三谷きみ	福原たま	田中よし
香坂さつ	江守しん	福井しげ
都筑じやう	內田すゑ	關口まさ
高田きた	平林かよ	今中なを
北西うの	小關ともゑ	渡邊じやう
山崎はな	伊與木たきゑ	後藤てつ
榎本ます	松村りう	中島さだ
岡田よね	天沼よね	簑田さだ
小出はな		

（合計　四十名）

當日の來賓は、久我府知事、辻新二、市參事會員、參事官、學務委員、府會常置委員、各學校長、區長及文部官吏凡二百餘名にて頗る盛況なりしと云ふ。

●彥根町立高等女學校卒業式兼創立紀念式　彥根町立高等女學校に於ては、去る七月一日午前第九時

より、第一回卒業證書授與式兼創立紀念式を擧行せられたり。來賓には、八木犬上郡長代理山田郡書記、田部町長代理辻助役、廣瀨警察署長、大日方公立彥根病院長、友枝收稅部長、今井尋常中學校長、上野尋常小學校長、學務委員、町會議員、卒業生保證人、其他有志者等四十余名にして、先づ着席するや、一同敬禮、儀式擧行の旨を告げ、唱歌君が代齊唱二回、勅語捧讀、松山敎頭の本學年間成蹟報告、次に池内養蠶實業敎師の申告等ありて、卒業證書并に養蠶修業證書、卒業紀念物の授與等あり、それより學校長の演說、補習學科卒業生徒總代中川繁野子の答辭、本科卒業生徒總代小川すて子の答辭あり、次に卒業生一同の唱歌(仰げば尊し)在校生徒總代上野京子の別れの文朗讀、在校生徒一同卒業式の唱歌等ありて、式の終りを告げ一同敬禮、それより來賓一同を休憩室に導きて茶菓を饗し、卒業生の論文、其他試驗成蹟表等を來賓一同に閱讀せしめ、各退散せられしは同十一時半なりと。

又在校生徒一同には卒業を祝し、且離別の情をあらはす爲め、卒業生一同に扇子を送られたり、尙本科四學年生一同は同じく卒業を祝せん爲、職員卒業生等を別室に導き茶菓の饗應をなし、福引の余興をせられたり、午後同校運動場に於て、紀念の爲、卒業生職員一同撮影せられたり。當日卒業生の人名を擧れど

補習學科二名　中川繁野　北村辰

本科四名　小川すて　宇治原すゑ

外村よしね　北川やす

凡て六名なり

同日創立紀念遺物としては、卒業生一同は、生徒總

代となりて同校南門の西側に、高さ四五尺計なる雌松を植ゑらるゝ是れ同校の益々隆盛に趣かんことを希望せん爲なりと。

同校にては、昨年より同校生徒の内有志者のみ、養蠶傳習所に於て其科を修められしが、本年は特に養蠶の一科を設けられ、本科四學年以上技藝專修科、三學年の生徒等實業敎師池内政次郎氏につきて實習せしめられ居りしが、同日左の第一期養蠶修業生四十九名を得られたり、内本科は六學年生八名、五學年生十五名、四學年生二十五名、技藝專修科生一名なり。

そも〳〵式場には、本科及び技藝專修科、各學年生の製作に係れる、我國條約國の國旗、其他本科五學年生より、扇形に、松か枝に朝日を添へ左の如き自作の歌を書きたる額面を式場の正面に掲げ以て裝飾せられたり

仰ぎみるかけいやたかきわが窓の
千代の根ざしにたぐふ松か枝

同日甫守同校長には、午後六時より、同校楷上の一室に於て晩餐會を開かれ、職員卒業生を招待せられたり、會場の裝置着席の順序、給仕の仕方等は、凡て西洋風になし、生徒に實習せしめられ、料理は本科五六學年生徒の擔當にて、日本料理なり。主人は甫守同校長主婦は、岡田敎員給仕人は本科六學年生宮村つる子、上田おい子、三居環子、富水たか子、給仕長は西澤末尾子なり、互に胸襟を開き、興を盡して午後十時散會せられたりときく。

●水野某の妻　石川縣加賀國金澤市寺町に水野某と云へる人ありけり、久しく警部を務めし人なるが、彼の大久保公を害ひし、島田一郎に黨せし科にて、

囹圄の人となりしが、不孝にもいたつきにかゝり、遂に牢死せり、活潑にして行正しく、克く職務に勉勵せしが、此人の婦人も亦得難き人にて、初め夫の捕はれし際にもいさゝか騒ける氣色なく、一人の老いたる姑、三人の幼き子をなだめすかし、後々の事など必ず心かけたまはぬやうにと、聊か後顧の憂なからしめ、いさぎよく出立たしめしが、後いよゝ東京に護送せられし折、親戚知人あまた見送りし節にも、三人の子を連れ、父は御國のため捕はれ人となりて、遠く行きませど、萬一にも長く歸り來ませぬも知られねど、とくと御顔姿を拜み置けや、汝等も成長せば御國のため大功を顯はし、流石は水野某の子よと世の譽を得むやう心掛けよなど敎へ勵まし、見送りの人々に對する挨拶待遇ぶりなど、一として行き屆かぬ事なく、泰然として露色を變へざる樣は、白峰のいみじくあれたつが如く、人皆感せぬものなかりき。されど其時婦人の心中は如何につらかりしや、又如何に悲しかりしや思ひやるだも憐れなり。さて其後よく操を守り、ねむごろに姑に事へ、きびしく子を敎へ、家を整へ、只管夫の期滿ちて歸り來ますをのみ獨寢の閨寂しく待ち暮しゝが、無情の旱天此婦人をあはれまず、多望の士を奪ひ、終生の望みを絕たしめしこそ哀れと云ふも中々愚なり、中には再婚を勸むるもあり、又浮きたる人々の云ひよるもあれど、などて聞き入るべき、毎に人たるもの道妻たるものゝ行ひを說き諭し、堅固に身を持せし故、誰とて又彼是云ふものゝなくなりしぞ婦人のためにはわきたる五月蠅を逐ひ拂ひし心地ぞせしならん、今や婦人の心中を推し量るに姑に慰め事ふること、夫の菩提を弔ふ事、遺子を養育すること、家を

整ふること、此の四つに汲々たるの外には、何物もなかるべし。されどにや、溽暑身をこがす夏の日も嚴寒身をつんざく冬の夜も、太陽の出でざるに婦人の身は既に洋燈の下にあり、夜深く人定つて往き來ふ人の音絶ゆる頃も、婦人の身は尙寢につかず、斯の如く善く事へ能く敎へ、克く勤め克く勵むを以て、一家常に和氣の洋々たるのみならず、總ての事整然として秩序の正しき事恰ら軍律に於ける如し、さるに爰にまた婦人の心を苦ましむる事こそ出來ぬ、是を何事ぞと問ふに、婦人がいとも敬ひ事ふる姑のいたつきになやめる事にぞある、婦人ます〳〵ねむごろに事へ、食事の間も枕邊を離れず、衣帶常に解かず、按摩に、湯藥に、洗濯に、至らず盡さずと云ふことなし、然れど老衰のかなしさ、耆婆扁鵲の名手も、婦人が正質なる看護も、如何ともなしがたく、遂に子息（婦人の夫）の跡を逐ふて黃泉の客となりぬ。さきには同穴の契を結びし夫にさきだゝれ、今はたゞ一人の姑に死分れたり、あな婦人こそ浮世の不幸を一身に擔へるものころと云ふべけれ、されど婦人の貞操を姑によりて夫に知らるゝと思はゝ、少しくは心を慰むるに足らんか、家もとより豊ならされども、婦人か手一つにて野邊の送り七々の供養もねむごろに營みしが、斯く久しきが間、善く姑に事へ、操正しき事上に聞ゑけれど、厚く賞して其行を彰表せられたり、世の澆季となるにつれ、耻をも耻ぢず、身をけがす婦人も數多ある中には、瓦礫の中の玉にも比して實の烈婦とこそいふべけれ。長男玄太郎氏、今、本縣の收稅屬となり、職務に勉勵し、孝行の譽高し長次女も皆良家に嫁き豊に昌へ行けるぞめでたしとも芽出度。

（石川縣　山田りう投稿）

●大多喜町の實業補習學校　千葉縣夷隅郡大多喜町に設けられたる、實業補習學校は、專ら女子普通敎育の補習をなさしめて、實業上の要素を授くると云ふに在り、今同地より其の規則書を送られたれば左に掲ぐ

町立大多喜實業補習學校規則

第一條　本校は明治二十六年文部省令第十六號の旨趣に基き女子普通敎育の補習をなし他日諸般の實業に從事し又は從事せんと欲するものに簡易の方法に依り其の職業に要する智識技能を授くるを以て目的とす

第二條　本校を大多喜實業補習學校と稱し大多喜町大多喜四十番地に置く

第三條　敎科を分ちて脩身讀書習字算術裁縫養蠶製絲染物機織とす

第四條　敎科課程を定むること左の如し

敎科程度

一脩身　敎育に關する勅語の旨趣に基き人道實踐の方法を授け兼て諸禮を授け務めて貞淑の德を養ひ言語動作其の宜に適せしめんことを期す

一讀書　本科は尋常小學卒業以上の資格あるものに課するものなれば敢て重きを置かず修身書を講讀せしめ又日用文を授く

一算術　珠算により加減乘除並に比例百分算を授く

一習字　行草の日用文字日用書類を習はしめ實用に適せしめんことを期

一裁縫　運針法、縫方、裁方、繕方を授け兼て衣類洗張の仕方を授く而して本科は實用を旨とし技能に熟達せしむるを期す

一機織　木綿及絹糸交りの普通織り方を授け進んで絹機を授け徒に高尚に進ましめず實用に適するを旨とす

一染物　木綿物絹物の普通簡易なる染法を授く

一製絲　座繰器械により製絲の方法を實習せしむ

一養蠶　春蠶夏蠶秋蠶の飼育法を授く

教科課程表（略す）

第五條　教科を分ちて本科撰科とす本科とは順序を踏みて學脩するものにして撰科とは一科若くは數科を選み特に脩むるものとす

第六條　本校に入學せんと欲するものは脩業年限四ヶ年の尋常小學卒業以上のもの若くは卒業せざるも學齢を過ぎたるものは校長の許可を得て入學することを得べし

第七條　本科生修業年限を三ヶ年とし撰科生は一科六月を以て卒業期とす

第八條　授業時間は毎日凡六時間とし日の長短により之を伸縮す

第九條　休業日は毎月曜日祝祭日皇后陛下御誕辰日本校創立紀念日

冬季休業自十二月廿五日至一月七日

第十條　本校は夏季休業をなさずと雖も八月一日より同二十一日迄は練習期とし教科を進めず故に欠席せんとするものは各自の随意とす

第十一條　入學せんとするものは先つ校長の許可を得て左の入學證書を差出すべし

（入學證書略す）

第十二條　一學年を二期に分ち毎期小試業を行ひ毎學年の終りに大試業を行ふ

第十三條　本科及撰科を卒業せしものには左式の證書を授與す

（卒業證書略す）

第十四條　授業料は一月本科生は金二十錢撰科生は金四十錢とし毎月十日を収納日とす若し當日休業なれば翌日収納すべし

第十五條　校内寄宿志願の者は之を許す而して寄宿生は寄宿舍規則を遵守するものとす

第十六條　本校に評議委員若干名を置く

（寄宿舍規則略す）

●某貴婦人の談話

某貴婦人の此頃物語りしといふ話を聞くに。家庭嚴肅を以て世に名ある、日々の出入りも多く、客の接待も繁けれど、應接の禮儀を學ばしめむとて、身分ある人々の令孃達を托し來り、朝夕のしつけを習はしめむとし給ふ方々、數あること

となるか、この方々は、多くは學びの業さへ萬づれろかなるは無く、抹茶活花の技も何呉れとなく修め居給ふことゝて、あるは千家の表を學びぬとか、池の坊に就きて修めぬなどいふもの多く、成程閑室四五の客打ち集ふて、松籟を聞きつゝ清風習々として腋下に生ずる折柄の炭のつぎやう、布紗のさばき、何れも巧みならぬはなく、活花の技もまた何れも手際善きは感ずるに餘あることにて侍れど、扨てこれを實際に於て見るときは、遺憾に堪へぬことの多かり、そを何何といふに、斯くまで巧みなる茶の湯の技も、實際客に接して接待するときは、何の甲斐も無くして、婦人の擧動としては、萬づ飽足らぬさまのみ多し、活花にしても、庭前一枝の花を折りて、直ちにこれを活け來り、即座に風雅を極むるなどの心得は、さら〳〵無く、只宗匠の教訓を固く守りて、座敷に安居し、花屋が調へたる花をもて、天地人などゝ型の通りに活けるのみにて、少しも活用といふことを知り給はぬが多きぞ口惜し、斯くては茶の湯の爲に茶の湯を學び、活花の爲に活花を學ぶものにて、その甲斐無きにては候はずや、昔は利休水を湛へたる平かなる大鉢に、一枝の梅を添へて、これを活けよやと言はれけるとき、少しも躊躇ふさまもなく、徐に梅枝を持ち、手もて倒しまに花をこき落しけるに、鉢中水に浮ぶ花片ひら〳〵として、風流の極意をここにつくしぬとさへ聞くものを、今の宗匠達も、心して風流の眞の精神を傳ふるやう心がけねど、空しき遊戯と均しなみにけをされなむは、いと悲しきことにぞ侍る云々

と云はれけるとなむ、常に家庭に心を致す人々は一考すべきことにこそ。

●金澤の老樂會　加州金澤市小松町字京町の人、今坂甚作、廣瀨半助、高宮榮助の三氏は、既に古稀を過ぎたる高齡なるが、知友普ねく膝を接して、互ひに酌むの好會なきを遺憾とし、茲に老樂會なるものを催はし、六十年以上の高齡者相集まり、互に懇親を結ばむことを發企したるに、感を同じうするもの續々出でたるを以て、此ほど同地西町一山樓に於て、第一會を催はせり。今其の模樣を聞くに、當日午前八時より古今書畫等各自提携したるものを陳列し、和歌、俳諧、抹茶、素謠、生花、圍碁、將棊等各々會意の道を樂みて、新舊の快話に時を移し、午後に至りて酒宴を始じめ、年長者牧野與三助氏を首座として着席し、清水一信氏起つて、我々老年者の今日あるは　天皇陛下の大稜威の畏こきに依る、殊に二十七八年の戰捷より、我儕愈よ老樂の歡を得るに至ること、偏に聖恩の渥きが故なりと。述べ、次で一統　天皇陛下萬歲を三唱し、献酬の間胸襟を披いて談笑し、倘は幾久しくもと謠ひをさめ、何れも十二分の歡を盡して退散したり。當日會するもの二十一名、今其の人名及び年齡を掲ぐれば

牧野與三助(八十五年)綿谷次郎助(七十九年)石田安右衛門(七十八年)廣瀨半助(七十四年)西浦新太郞(七十三年)永山政一(七十三年)西浦乘賢(七十二年)宇都宮源三郞(七十二年)高宮榮助(七十二年)谷口善助(七十二年)野村忠右衛門(七十一年)本陣甚助(七十年)武田武平(六十九年)慶林坊宗八(六十九年)清水一信(六十八年)高田宇平(六十八年)今坂甚作(六十八年)小川勝信(六十五年)下德在(六十二年)岸本理助(六十二年)今村次助(六十年)

にして、又た此の年齡を合算する時は、實に千四百八十二歲となる。其の平均年齡は七十歲强なり、倘

は同會に於ける歌俳を聞くに、

六十路餘り八十五歳も老らくの　西浦新太郎
友の盃よひかはすなり

二葉より小松が原に住居して　同
なは諸共に老そことはく

老らくのれのがまに〳〵一山の　西浦乘賢
たかどのなべて千代よはふなり

目も耳も樂しや月と時鳥　武田武平

涼しさや親しく遊ふ老の友　高田宇平

●米國に於ける日本茶園の開園　米國ニユージヤセー州アトランチツクの日本茶園は、兼て建設工事中の處、最頃落成せしを以て、去る三日開園式を行ひたる由、當日の入場者は招待客を合し無慮一萬五千名にして、飲用法も全く日本風の急須を用ひ、牛乳砂糖等を用ひずして入場者の賞賛を博したりと。

●庭園に苔を發生せしむ新法　新に庭園を作り、又は古庭の手入れなどせし後、年古りたる樣に俄に錆を發生せしめんと、種々苦心する人あり、今手輕に苔を發生せしむる方法を聞くに、凡そ苔に七種ありて、即ち土上に生ずるもの、樹木の幹枝に生ずるもの、石に生ずるもの、岩に生ずるもの、瓦に生ずるもの、板屋根茅屋根に生ずるもの、砂地に生ずるもの等是なり、右は何れも米洗水又は馬鈴薯の腐敗したるものを好むが故に、馬鈴薯を山葵卸にて卸し、其液を石又は樹木に塗り附け置き、後米洗水を四五回撒布し、且つ成るべく日除を設け置けば、數日の中に苔簇生するものなり、又最も急に苔を發生せしめんには、他處にて天然發生せる苔を取り來り、之を日光に乾し、手にて揉みて細紛となしたるを、馬鈴薯を摺りたる液に投ずれば、立所に苔を生ずると

云ふ。

●六十貫目の大龜と一丈三尺の奇魚　去る十二日大分縣築上郡高濱村小松七平、吉本治助等が捕へたる大龜は、大人二人を乘せて陸上を動き廻り、海中なれど四人位を乘せても容易に泳ぎ行く由、體量は六十貫目もあり、疊一枚敷位の大さにて、殆ど五六百年以上の齡を保ちしものならんと。又同縣西國東郡岬村大字見目の宮崎佐一なる者、このほど出漁の際、氣落の濱にて奇魚を見附け、早速村の者十八許りを雇ひ漸く我家へ持ち歸り、能く〱見れど、其形蜻蛉に似て、長さ一丈三尺幅八尺に餘り、魚に似て魚にもあらず、固より肉は少しも無く骨の上に皮を張りたるものにて、頭上に牛角の如く後に曲りたる角あり、角と角との間に徑八九寸位の穴ありて、穴の中に拳大の白き玉ありと、この奇魚を見物せんとて、近村より群集する者引きも切らずといふ。

(松の下枝)

おくつゆも
たまさみねけり
あさからぬ
おやのなしへの
にはのなでしこ

社告

本社は今まで、諸方の姫たちよりおくらるゝ、兼題の歌文の、締切の期日までに、到着せしもの、中より、特にすぐれたるもの三四首を撰み出して、天地人の三才に配し、其の撰みに當り給へる方々へは、それ〴〵定めの如く、(天三部、地二部、人一部宛)本誌をおくり參らせ、其の他はすべて、到着の順に紙上に掲ぐる例なりしが、近き頃は、歌文の數いたく增りて、歌は常に、數百首に上るやうなりにたるに今までの如く、僅かに三四首のみ撰み出さん定めにては、殆んど、同趣同向にして、甲乙を定めがたきほどのものも、一は撰歌として、賞品を受くる上に特筆せられ、一は到着の順に、なみなみの者の中に列ね記さるゝ事となりて、撰みにもれし人々の心にも、いかでかり悔しからんと、思ひやらるゝによりて、今よりは、天地人の外に、秀逸といふをおきて、三才の撰みにはもれたれども、なほ、並々のものにはすぐれたるものを拔き出で、其の次に書し、その他をぞ從前のごとく、到着の順に從ひて、列ね記すべけれど、この心を得て、今まで、撰みにもれ給ひし人々も、ふるひて詠み出でたまへかし。

歌にまれ文にまれ、題ごとに別紙に書し、文字は鮮明に、假名は萬葉假名を用ひず、普通のものゝみを用ひ、又、歌一首の上に、上の句の中に、二こゑの漢字二字を用ひ、下の句の中に、二こゑの漢字一字を用ひて、左の書式の如く認め、發行日より十日前に必ず、本社にいたりつく樣おくられたし

書式(用紙は半紙形にて、歌は一人二首に限る)

題　住所　姓名

初句……二句……三句……
四句……五句……

初句……二句……三句……
四句……五句……



教の庭

八月五日兼題　氷

（天地人秀逸のほかは原稿到着順）

天

大坂市高麗町四丁目　山崎　玄つ子

うりあるく聲きくまゝに涼しさの
　先づ身にしむはこほりなり鳧

地

麹町區三年町四番地　梨本　信子

君か代のめぐみの露を結ひおきて
　夏もきえせぬわつこはりかな

人

横濱市相生町四町目五十七番地　三谷　起美子

袖はらふかせにもまして涼しきは
　なつの日なかのこほりなり鳧

秀逸（十四首）

かせよりも月よりもなほ夏の日の
　涼しきものはこほりなりけり　青木　春子

風たえてあつき盛りもこほりうる
　聲は聞くたにすゞしかり鳧　田津木　久子

たてまつるためしは絶て賤の身も
　こほりえやすくなれるみよ哉　真鍋　直子

いろさむきけづり氷を手に取れは
　みにしむはかり涼しかりけり　林　久子

こゝろまて涼しくなりぬ夏の日の
　氷はきよきものにそありける　星野　かつ子

掻きなして雲か花かと見るまてに
　うつはもきよく盛るこほり哉　星野　ひさ子

たへやらて扇のかせもあつき日に
　うれしきものはこほりなり鳧　土肥　仙子

たへかたき夏のあつさを忘るゝは
　わつきこほりのなさけなり鳧　永井　さい子

ひらけゆく御代の恵みの嬉しさに
　夏もこほりのかけを見るかな　名取　正代子

氷うるこゑはちまたにひゞくなり
　つらゝとりにし冬そこひしき　岸　せつ子

玉まりを持手つめたくけつり氷は　野中　あさ子
のまぬさきより涼しかりけり

玉椀にすきとほりたるけつりひは　杉山　かね子
すゞしき色のかぎりなりけり

はるもさの島もる人にれくらはや　一番瀬つぎ子
なつなほさむき室のこほりを

これなくは何にしのかむ夏の日に　吾妻　ちか子
嬉しきものはこほりなりけり

夏ながら照日にうときやまかげの　栁田　さと子
谷間のこほりいざやとりてむ

風絶えてしのきかねたる夏の日は　諸非　くら子
たゞこほりのみいのちなり鬼

衣手につゞふしづくもいとはれず　田中　冬子
夏はこほりに老くものぞなき

山かげのこぞのこほりをとり出て　杉浦　とい子
みるさへ涼しなつのひなかに

嬉しくもてゝにこほりとそま人も　帶刀　ます子
夏のあつさをわすれぬるかな

夏の日に冬のこほりのなかりせば　池谷　とみ子
いかであつさを忘れはつべき

めせ〳〵とうるや氷のこゑよりも　佐々　有鄰子
あつさはさきにながれぬる哉

堪へがたきあつさをふゆの氷にて　北島　功子
老むしかほとは夏わすれせむ

たへがたきけふの暑を老むしだに　石川　類子
忘るゝものはこほりなるらん

暑き日の眠りざましと來りにけり　石川　きむ子
こほりめせてふ聲のきこゆる

手にとれどとけんともせぬあつ氷　石川　田鶴子
夏もふゆかとあやまたれける

涼しげに里のわらべのこほりうる　冬木　わか子
こゑにあつさもわすれける哉

夕まぐれ手にとるからに涼しさは　仁井田とみ子
氷室のかぜやふきかよふらん

いとひにしふゆの氷もけふころは　北島　松子
あつさを凌ぐものとなりけれ

開けゆく御代の老るしは水無月の　德永　萬壽子
みやこもひなもこほりうる聲

ひらけゆく御代の惠のけづりひに　碓井　信子

あつさわすれてけふも暮しつ

たへがたき暑もしむしけづりひに　碓井　武子
わすれてくらす今の御代かな

夏ながらさゆる霜夜をおもふかな　羽田　三緒子
こほりのむろに暑さわすれて

こほりうる盤も涼しくおぼゆなり　甲斐莊ゆふ子
風もともしきみやれほぢに

なつ知らぬ氷のかせのすゞしきに　非出すゞの子
すきにし冬もわもはるゝかな

水無月の照日も知らぬけつりひに　有坂　淸子
夏のよそなるこゝちこそすれ

水無月も涼しかりけりひむろやま　有坂　いう子
こぞのこほりの今ものこれは

さゝげゝん氷室のためもの後たねて　牧野　貞子
賤もすさむる世とはなりけり

暑さをもしらぬこほりとよぶ盤は　小野田のふ子
すゞしき風のかよふこのもと

夏の日のあつさかりにこほり水　小野田癸字子
のむこそみよのめぐみなり鳧

かこひなすひむろの氷とけそめて　田中　りん子
むすぶも夏はすゞしかりける

堪へかたき暑さもしはし忘るゝは　杉浦　芳子
ふくむこほりのなさけなり鳧

たへかたき暑さもしむし忘るゝは　半谷　いく子
もつ手もひゆるこほりなり鳧

けふも又こほりうる人またれけり　廣田　とめ子
あつさにたへぬ夏の日さかり

常盤なるみよのめぐみの夏こほり　香川　英子
いさ手にとりて夏をわすれん

みなつきのけふたてまつる氷こそ　河野　多加子
淸きこゝろのためものなりけれ

ふもとこそ夏と秋とのさかひなれ　河野　八重子
氷室のやまのかせそみにしむ

みな月の土さへとくるあつき日を　伊坪　ふさ子
こほりを友にすごしつるかな

てるひにもとけぬたかねの白雪は　武田　粲子
神よながらのこほりなるらん

うち見れは衣手さむくなりにけり　佐藤かめを子
氷室のやまのあつきこほりを

よろつ代を君にさゝけて祝ひてん　太田　たけ子
結ふこほりのあつきこゝろを

氷うるこゑのかと遠にきこゆれは　伊東　みよ子
涼しかりけりなつをわすれて

なつしらぬひむろの山の下かけは　村田　ひさ子
ふゆのなこりの風やふくらん

動きなきあまつ日つきの惠みには　山本　常子
こほりも夏のものとこそなれ

谷蔭にのこるこほりのすゞしさに　萩原　章子
なつとしられぬいはと山かな

氷うるのきはにたては木かくれて　増田　すゑ子
涼むよりなほすゞしかりけり

司ひとたてまつりたるこほりさへ　佐々木千鶴子
市にうるまて世はひらけけり

水無月の照る日の影に消えもやらて　祖山　松枝子
殘るこほりそすゞしかりける

夏されはかせまちえつゝ涼むより　原　いち子
こほりうる子の聲そ身にしむ

水無月のてる日限なきあつさにも　上條　よし子
とけぬこほりのあるそ嬉しき

薄ものゝそてなほ堪へぬ夏の日も　勝　もゝよ子
こほりうりゆく聲のすゞしさ

四つの時市にこほりの絶えぬこそ　萩原しける子
開けゆく世のめくみなりけれ

たへかたきなつのもなかはあつ氷　芦原　よう子
うる聲さへもすゞしかりけり

けつりひをてる日盛にひさくなり　矢野　高子
大みめくみのあつき御代には

日の影のうとくをくらき氷室こそ　久松　せい子
夏にしられぬところなりけれ

ひらけゆく御代の惠みに賤か身も　今藤　なか子
あつさわするゝ夏こほりかな

よそめたに羨ましくも見ゆるかな　重松　たか子
ひむろ守る身やいかに涼しき

いかはかり寒けき夜半に結びけん　廣瀬　喜久子
夏なほとけぬかたきこほりは

うたゝねの夢おとろかすこほり賣　奥原　ふく子
聲きくたにもすゞしかりけり

かせさむみいけの汀をけさ見れは　田巻ひてよ子
おち葉なからにうすらひに鳧

なつの日もとけぬ氷はたてまつる　小町谷里江子
御代のおもののしるしなり鳧

聞くにだにすゞしくなりぬ八巻に　小町谷　園子
わつさもなつのこほりうる聲

八月五日兼題　避暑

天　（天地人のほかは原稿到着順）

播磨龍野　眞鍋直子

あつし／＼といふは、年毎のならひなれども、今年はわけて少しの雨もふらで、照りはたゝく暑のいとたへかたうて、過しかねつる折しも、山里に住みませる伯母君のもとより、いつも夏にはくらしわひぬる身の、いかに暮しつる、こゝは山陰にて、日かけもうとく、おのつから去のきよければ、暑さ避けかてら來よと、いひおこせ給へり、かしこには、おのかたまあへる友もある事とて、いと／＼うれしく、いそぎ何くれの調度とゝのへて行きぬ、いつとても清く物去づかなるさまの、いとゆかしう思ふ物から、ことにこたびはあつさにくらしはてつる折からとて、松杉のいたう生ひ茂りて、照る日もよそなるに、前には消きなかれのありて、吹きくる風のいとひやゝかなるなど、うき世の外の心地のせらるゝに、伯母君はじめ、友人のいとまめやかに、こゝには人もすくなく、いとざう／＼しけれど、夏はこゝにて過し給へなど、いはるゝうれしさに、今日の日のあつかりし事も、忘られてなん。

水のおとも清く涼しき山里に
　うき世の夏を忘れける哉

地

石見國津和野　水津すけ子

暑もしらす顔なる青葉のかげやよからむと、みやこぢ遠きやま里に、緑の木の葉わけ入るもあれど、磯べちかく海水浴とやらむにおもむくもありて、おのがじゝ暑をさくるに、おのれも暑中の休暇にもなりぬれど、人なみに思ひたちぬ、されど女の身の、ただ獨りものするもいかゞあらむと、思ひ煩ひゐたりしが、某の里に在る兄きみの元より、休暇にもなりたらむには、いそぎ來へしと、ありけれど、とびたつばかりにうれしく、汗おしぬぐひつゝ装ひして、北朝つとめておき出でゐるに、まだ空は明けやらで、ところ／＼に三ツ四ツ二ツ、星の輝き、有明の月は西のやまの端にのこりて、すこしの雲だになく、一

天拭ひたるかことく晴れわたり、東天に薄くたなひけるくれなゐの雲の、やう／＼にきえゆくさま、えもいはすをかしく、すゝしき朝風、旅ころもの袖を拂ふもいと心ちよし、まして日頃思ひたちたることどのれもはぬにとく成りて、たのしきけふにあひぬるをや、家をいでゝよりほど遠からぬに、夜はほの／″＼とあけゆきて、山の端を照らす旭の色、紅の如くなるに、暑はきのふよりもいやましにまして、汗はいづみのわき出づるかごとく、甑の中にも入りたらむ心知して、くるしさいはむ方なし、夕近きころ、兄ぎみのやどりにつきぬ、夜に入りたらど、たゞ單の衣にてははださむき心地して、晝の暑は打わすれて、夜更くるまでうち物かたらひぬ、この宿のまへづらは、淸き水の西より東にながれ、緑り茂げれる森は、後の方に立ちならびて、風の宿りとれもふもいと樂し、月の光りは水に落ちて、玉ゆらも止まらず流るるさま、玉のくだかれたるやうなり、をり／＼きこゆるわやしの聲は、狐の友などをよぶにやあらむ、つぎの日にもなりぬれど、都の暑れもひいでられていかならむと、時を經るまゝに、よへの如くはあらねど、日中にても涼しき風はたえず吹きて、夏はいづちにゆきけむとれもはるゝに、とくより物し給へる兄ぎみの、ねたきまでうらやましくなりぬるもをかし、己れはこのやのはした女などに案内せさせて、をちこちとそゞろありきして日をたくりぬ、さるにても、こは夏しらぬこの地のたまものにやあらむ、あらず／″＼、兄ぎみの深き御恵によりてこそ。

人　在香川縣高松市天神前百五十六番　牧野貞子

すべての時にそむき折にあはぬは、心ゆかぬ物なり、されど例にもあらぬ今年のあつさを、一日にてもさけむやと、朝のほどより、たれかれ伴ひて海邊に至りつ、なにがしといふ樓にいこふ、こゝよりは左に名高き古戰場屋島をながめ、遠く小豆島より、近くは女木男木などの小島、いくつともなく、まのあたりに見えて、いと景色よし、とかくしてひるげなどするに、風いとあら／＼しう、浪の音さへみにしみつ、はや心さむく覺ゆるも、處からなるべし、ひる過ぐれど、人々集ひて、潮あむもの、釣する者、さま／″＼なり、中學の生徒にもやあらん、ボートを浮

べて、互に競ふ様をかしく、水兵のよそほひしたるなど勇まし、彼方には水泳の師ありて、數多の童に、術をさづけつゝあり、かくてあたりやう〳〵靜になりゆけば、いさ浴みてむと、支度なし、ほとりに至れど、打よする浪の岩にくだくる音寒く、今さら身もちゞみあがりぬ、つれの者にはげまされて、漸くむねのあたりの深みへ入るに、浪のよする度ごとに心どゞろき、今にもまろびんやうなるを、岩かどに取りつきて、浪のまに〳〵身をまかすに、いつしか心地さわやかになりて、いづるも忘れはてつ、出ては形をかしき貝など、磯づたひに拾ひめぐりつゝ、日も暮れそむれど、やがて山の端よりいざよひいでし月影の、波間にてり渡りて、そこら隈なうきらめく様、さながら黄金の浪にもたとへつべし、海士の子らも歸りぬれど、今は浮世はなれし心地して、暑さのみかは、夏ともおぼえず暫し人心地もなくたゝずめど、かたへの人の、余りにはだ寒うおぼゆるに、とくかへり給はずやと、うながすにのこりをしうはあれど、さてあるべきにあらねど、また明日もこそと家にかへりぬ。

佐々有鄰子

荒金のつちもさくべく照りかはす此ごろの日影に、扇はとれど湯氣のごとき風を起し、庭の木かげに立ちよれど、青葉しぼみてやくがごとし、窓の文机をうちて、あなくるしやとうめきぬれど、ほと〳〵門たゝく人あり、たぞと押しあくれど、中がきのへだてなき友達になんありける、此のあつさにといへど、さなり、避くべき地を求め得たり、いざ〳〵と、そゝのかされ、足ゆひかさしもそこ〳〵に、足引の山鹿の温泉になんつきにける、此は別天地なして、冬の寒をしらず、夏の暑はことに更に、かたびらのうすき衣はかきやりて、袷のほしくなもはねて、避暑には、年ごとにゆあみせまくほしくなん。

名取正代

てりはたゝく三伏のあつさ、今年はわきて堪へがたきに、ましてあしき病さへはやり來ぬるを、何とて此の所せきちまたにありて、うちむされつゝ苦しさになす事もなくてありなんや、いかで山水の清うすみわたり風の涼しう吹きすさびて、夏なき所もがなとおもひて、それの山里にいたりぬるに、げに世を

ものがれしこゝ地して、いとすが〳〵し、かくてこなたかなたを見わたせど、そがひの峯には幾千本の松の木ども、をかしくなみ立ちて、其のにはひのめでたさいはん方なし、此のわたりに出湯あり、其の度熱からず冷ならず、又其の水の淸うすめるは、富士か嶺の頂にありと聞きつる、こがねしろかねの水もかくやとおもふばかりなり、かくてこゝに暫しが程、湯あみなどして、あつさをよそに、物の文など取出で、打見つゝありけるに、あたりしつかなれど、おのづからうみ怠る心もおこらざりき、げに山里は物靜にて、よろづにうるさからず、されど常にかゝるところにあらましかはなど、おぼえられてなん。

北島功子

先つ日より、した〳〵兄君に請ひ奉りしが、學期試驗とやらんにて、いそがはしく、とりわけ醫學科は、文理法工に比ぶれど學びのひまも長う、まして日頃怠りし報いにて、今日か日迄心の儘ならざりしが、明日よりは已が身に復しけれど、なれか日頃の望み叶へんとの御言葉、いと嬉し、さらでだにいとも待遠なりし事とて、早々したくとゝのへて、避暑ながら大磯の海水浴へとは出立ちぬ、いともやんごとなき君々の夫人令孃など、常には九重の雲深く、荒き風をもいとはせ給ふ御身にても、流石に此頃の暑さを堪へ兼ねてや、皆白き單の衣に、麥わら製の帽ま深に戴き、浴場さして行き給ふを見ければ、心いと浮立ち、已れも斯くと兼てより期しつゝも、又今更の如くにうれしう思へど、いそぎ衣ぬきかへて、已れも浴場の方へと歩みぬ、塵深き都の空をはなるゝさへ心地いとすが〳〵しく覺ゆるを、まして渺々たる海原見渡して、鹽汲む海士と諸共に、鹽風に吹きすさまるゝなど、興多く、堪へ難き暑さも、よせくる浪におし流され、今はいづこの岸にやたゞよはんなど、夏とは思はれぬ迄なりぬ、夜に入り、風加はれど、こう〳〵となる神よりもおどろ〳〵しき浪の音に、月の光りのうつりてさながら金龍の此凉しさにあくがれて、遠の海原、近の岸邊をあれ舞ふやうに見え、おそろしう、おもはず兄君のそば近うかけ入りて、兄君の笑はせ給ふ事もありき、ある時は濱邊に貝拾ひ、ある時は砂原をそゞろありきしつゝ兄君の此處の景色、彼處の山水なんど、筆もてゑがき

給ふに心浮きつゝも、覺えず日數へにけり、我身は此年始めての旅なれど、見る物聞く物、いとゞめづらかに面白かりしが、つきやすきはさめやすきの世の諺に逆はず、日數ふるまゝに、漸くうみて、そゞろ我家の戀しうなりぬれは、又々兄君に請ひ奉りて、此の月の始つかた、此地へとは歸りきぬ、鎌中記すべき事は濱の眞砂の數しれずあれど、拙き筆のせんすべなく、僅に其か一部をかくなむ。

北島松子

昨日今日暑さの堪へ難さ、我人共に同しけれど、余りに堪へかたけれど、思はず知らず苦しき言も洩すなり、かゝる時こそ大磯わたりへ游ひ、玉藻刈る賤の海女と等しく、海に泳ぎなど、いかばかりが心地凉しう腦のいたみも去りなむと思へど、暫しもたまらず、暑さの一入増すもいとゞれかし、思ひ起せど幾千萬の同胞は、天災とは云へ、海嘯の爲、あはれ無慘の死を遂げぬ、見るも聞くも皆涙の種ならぬはなし、親に別れ、子に先たゝれ、夫に別れ、明日よりは何をたづきに暮さむと世を果敢なむも多からむ、實に痛ましき限なり、其心根をくみゆけど、暑さはもの丶かずならず、いかにもして堪へもしつべし、避暑などゝは思ひもよらず、些かにても費を省き、此幸なき人々の安き家居に起臥するやう計るこそ、同し國民の務なれと思ひ出けれは、此くも記しぬ。

北島きよ子

朝夕は。すゝしといふ事のありて。いきのぶるわざあるに、今日は朝まだきより、いみじう暑く、そよ吹く風のたともなく、さながら甑の中に蒸されたらんやうの心地して、いふまいと思へど今日の暑さ哉、の句も思はれ、いと堪へがたくなんありける、日頃世の人々が、あるは、いかほ、あるは、函根、あるは、いたみ、草津、など、避暑する事の、ありときけど、田舍すまひの妾には、さる事の叶はぬこそ、いと口をしけれなど丶、かこちながら、妹の手を曳き庵の西つ方に、小高き丘ありて、松杉など、緑を競ひて繁れる木陰に、席設けて、四方を見渡せど、庵をめぐる、池の水、きらきらうごめきて、さながら、金龍を走らせたらん如く、風は松杉の梢にありて、輕き袂を飜しぬ、今迄幾度か繰り返し、堪へ難う思ひし暑さも、此池に流れ去れるにや、此風に吹

き消されたりしにや、忽ちすゞしく、いのちいきのびたらん心地して、いと涼しきながめなるに、歸るを忘れてありしに、母上、さぞまちわび給ふらん、また明日來なんと、妹と共に、名殘りをしく歸りぬ、あはれ何事も苦しみて後、樂しかるべきものならんかし、歸途一首を口ずさみぬ、

茂りあふ木かげにすゞむ我身こそ
今日の暑さも忘られにけれ

田中りん子

古へより、やめる人の、やしなひに出湯にものする事あれど、近き比までは、さならぬ人の、出湯にまかることまれなりけるが、世の開け進み行くにまたがひ、醫術も進み、身のやしなひも、おのづからよき便りを求めんことゝはなりぬ、夏の最中には身もやつれ、五臟もつかれ、氣力も薄らげど、なすわざもいとはかどらぬやうもあらん、尊きも賤しきも、人は身のすこやかにて命ながらへんとぞむなるべけれ、身を勤め心をくだきても、世の爲に盡さむとおもひ、身をたもたんには、夏の頃は山深きところ、海のほとりすゞしきところに、暑さをさけてこそ、常々身をつとむる手だてとや成ぬべけれ、おなじ山邊海邊にものせんにも、種々の溫泉場、海水浴もあらん、なれど、おのれの身にてきしたるところを、ゑらみて、いてんこそかんやうならめ。

福原菫子

まなびのいとま、思ふどちかすみを分け、山べ野べにと、ひたぶるに花にあくがれ、かへるさ忘れしも、いつしか過ぎ、早苗とる聲にぎはしかりし頃もすぎて今は夏のなかばとはなりぬ、塵ふかき都に住みわびし身も、學校の休みとなりたれど、いまは故鄕なる父母の膝下に、親しき同胞打寄りつ、あるは朝とく起きて、にほのはちすをめで、あるは月なき夕べ、ほど近き河べに螢を追ひ、風涼しき窓のもとに文繙きては、長き日を短しとかこち、夕月の影きよき軒端にちゝぎみにさゝ進めては、むかしのひじりの道をきくなど、必すゝまぬ海水浴溫泉などにくらべては中々に心安らけき避暑ならんと思ひて、かくなん。

廣田とめ子

打つゞく旱に、池かれはて、庭の小石もとけなんばかりにて、我身ひとつの起居さへ、ものうき心地す

れど、なすべき業をかいやりて、遠き海邊にあるは温泉にあそはんも心ならず、いかにせむやとおもひわづらひ、終に庭のかなたなる、はゝその木蔭に席をのべ、文よみ裁縫ふ事などなしけるに、茂りあへる木の葉に、日影はもれず、木の間くゞりて吹きくる風は、露ちらねども、衣手の霑ふむかりにて、夏の外なる心地せられ、日毎の業もとゝのへど、いとうれしかりけり、古しへの文にも、内にかへりみて疚しからず、體胖なりといへるも、げにうべなることにて、わらはが避暑、これにすぎたることやはある。

田津木久子

夏くる毎に、あるはいでゆ、あるは海の水浴なとゝ、人々のものし給ふに、さる事までとはれもはぬ物から、猶ひと度は行き見まほしう思ひ渡れとも、何くれと、事のしげくて、ゑはたさでありしか、ことさらに涼しき處をもとめずとも、心のもちかたによりて、涼しくもあつくもなるものと、あるやんごとなき人の、さとし給へるふみを見てより、今年は行き見まほしき心も絶えて、朝日もまた匂はぬ程の涼しき内に、いろ／＼のわざなしをへて、照りはたゝきていとたへがたきをりは、紀行文などの、いとをかしきを取りいだしてよむに、みづからそこにあそへる心地のして、暑さも忘るゝばかりなるに。まして夜に入りてよりは、みな／＼打ちつどひ、かゝるあつさにもさはらで、つゝがなきをよろこび、またけふなしをへつる事どもをかたりて、明日も涼しき内に、これ／＼はなしはてんなどとて、むつましうかたりかはすたのしさに、かのあつかりし事もわすれて、

心から夏なきものをことさらに
涼しきかたをなどもとめけん

香川英子

あまりの暑さに、所せき住居のいと堪へがたうて、身もやかるゝばかりなれど、いかにしてんと思ひつつ、よみさしたる書とりて、庭にれり立ち、稍大きなる松の木蔭に休らふに、こゝは夏なかるらんとれもふまでの涼しさ、いつしか心も清々しうなりにたれど、手にもつふみを繙くに、いみじう心ゆきて、樂しさいはん方なく、けふのみは、夏とも知らで、日の暮るゝまでもよみたりき、あはれわが宿にも、

暑をわするゝほどの陰はありけりと、いとゞ嬉しうて、あすよりは、此所を我物として、心ゆたかにすぐしてましなどゝ、おもふ折から、親しき友より、厳島の海水に、此暑を洗はゞや、とく思ひたちてよと、いひこしけるに、心置きなき我家のなつかしさは、厳の島にもかへがたうて、返しには、かゝる庵も、強ちにすて難けれど、此夏は宿の大木の下蔭に、とぞかりいひやりてなむ。

河野多加子

都は家もしげく、人もおほくして、夏のあつさも、たへがたきゆゑに、箱根などへ避暑とて人々行くなめり、ひなの地はものごとなべて、心やすく、家もまぢらに、人もいと〳〵少なくて、夏のあつき日も、夕ぐれに若葉のみどりふき送る風あり、つくろはぬ庭の垣根の朝顔や、紫陽花などのかず〳〵さき出づるけはいなど、避暑にとてわざわざ他所に出で行く都人よりも、避暑とかいふことだに知らぬひなの山里こそ、なか〳〵に心ゆかしけれ。

都よりひなこそ夏はゆかしけれ
　はわけの月のかげも涼しく

伊坪ふき

七月の始つかた、信濃なる叔母君より、今年ばかりは、避暑かた〴〵是非にこよとの、消息たびけり、すぎつる年にも、たび〳〵たまひぬれど、えゆかざりしかど、いなみがたくて、下婢一人を具して、六日の朝まだき、上野より例の汽車にのりて、出で立ちたり。其日は田中なる藤屋といへるに宿れり、七日には下の諏訪に至り、先づ明神の社に詣で、亀屋といへるに宿り、いでゆに入りて汗を流せり、八日には飯田に至り、それの宿屋にかりねて、あくる日の午時頃、叔母君の許に至りつきぬ、こゝは飯田より南へ、三里許りへだゝりたる、三穂といへる村にて、片田舎なりけり、ようこそ早く、恙なかりしよ、それは何よりなど、家人に迎へられ、其日は都のこと、田舎のこと、かたみにつもるくさ〴〵の談にて終れり、それより二日三日のうちは、たゞ談するのみにてへにけり、都にては、え堪へがたかりつる暑さなりしも、田舎にては、左程にも覺えざりけり、夕顔南瓜なんどの、庭先にはひかゝれるなどをかしきに、西門ぎはより、遥なる山のすゑまで、青田一つゞ

きにつゞきて、田面ふく風のまに〳〵立つ小波は、海邊の景色してをかしかりけり、左も右も緑したゝるが如き青葉、しげみにしげみて、見るだも、涼しき心地ぞする、まいてきしる車の音もなく、はこり立つる馬さへ稀にて、犬の遠吠、鷄の鳴聲なども、のどやかなるこそめづらかなれ、かの名高き天龍橋へは、程近けれど、たび〳〵ものしつ、そのけしきのまれなるは、かの耶馬溪にも勝りつべく、天にも屆くばかりのくすしき岩の、いくつともなくうちつづきて、立ちこむる中を、底まで見ゑて清み渡れる水の流れゆき、都なる日下部大人の撰ばれる、八景の、水ぐきの跡さへゆかしく、暑さをさくるには、こよなき處ぞかし、又あるは園原をめぐりて、箒木のあとを尋ね、あるは大河原をとひて、宗良親王の、旗あげたまひし昔を忍び、あるは飛彈の工匠のものせしと傳ふ、開善寺の敕使門を拜み、寺なる種々の寶物見などして、筆にも言にもつくすべからざる、樂みをかさねて、暑さを覺ゑざるのみか、日のうつるをも知らずぞせり、はや二十日あまりになりぬれど、あまる名殘をのこして、時又より舟にて天龍川を降り、東海道に出で、大磯に立寄り、湯あみせる友どちを訪ひ、新橋につきしは、月の終りの日なりき、あはれ、田舍は、避暑によきのみかは。

佐藤かめを

世を厭ふにはあらねども、片山里に住める身の、車の塵もかゝらねど、よろづにつけて心靜かに、草も木も、浮き世の人のさがを云はねど、四ッの時々、月花を友として打ち過ぎにしを、此頃のならひとて、晝はひねもす暑さに惱まされ、夜はよもすがら蚤蚊とせめられて、いとやすからぬに、今日も又、日ざかり頃は、いとゞ暑の烈しゆなり行きて、照る日のかげに、土さへさくるやうなるに、たよわき妾の身のたへかぬるまゝ、母上のゆるしを得て、妹と共に吾奥庭のいと老たる松のかげに坐をしきて、暫しいこひしに、青葉を分けて吹きこす風の、いみじう涼しく、湧き出でたるはだへの汗も納りぬ、梢にすだく空蟬の聲は、さゞ浪のよするが如く、岩間を流る澤水は、今日の暑を洗ひ流すが如く、いと心地よきに、茶を點じて、互に呑み、我がしきしまの文の道など語り合ひつゝ、手なれの團扇も今は忘れて、

そよ吹く風の心ちよさよと、思はず時を移しけるに、夕日うすく山の端に傾きて、鳥もねぐらへかへりゆき、杣山人の斧のひゞきもいつしかたえぬれど、吾れも靜かに其所を離れて家に入りぬ、げに今日のすずみこそ、妾の身にはこよなき樂みにて、千世の齢ものびぬる心ちして、いとたれも忘ろさによめる。

山里は夏こそことに住みよけれ
まつの葉ごしに風かよひきて

山本常子

土もさくといふこの頃は、朝より塵はかりも曇りなく、てりわたるたへがたさ、いかにかせましと、里はなれの森のあたり、いかにと物しつるに、木立をくらく生ひしげりて、清水のわきいでつる音も、いと涼しき所なりけり、かなたに人聲のきこゆるは、何にかと、立ちよりてきけど、田のは草とる賤の男のおりうたけして、あせれしぬぐひつゝ、ものがたりゐたるなりけり、ことしはかくもてりつゞきたれど、秋のみのりもさこそと、嬉しげにいひあへるをきゝて、つら〳〵思へど、かゝるあつさをいとはぬのみか、打よろこべる人だにあるを、たれもへど、涼しさよりも、今はそゞろ寒く、身にしむ心地してなん。

岸せつ子

暑さをさけがてら、ひさしくとはざりし、うからの家をおとづれんとて、父母の君をうちつれて、いたるにいとすゞしきところにて夏の日ともおもはれず、やがて一しきりふりそゝぎて、あつさをあらふ夕立の雨に、ふきくる風もいとすゞしく、青田の稲はなみよりて、涼しさいふばかりなし、父母の君さてはからやからの人々と端居して、濱松風のゆかしきしらべはあらねども、波靜かに治まりぬる御世のみめぐみの露にうるはふよろこびをかたりあひつゝ、涼しき月に清けきまとゐして、夏をもわすれてなん。

今藤なか子

夏の眞盛りはさながらむさるゝ心地して身の置處さへおしらず、折柄親しき友どち音づれて、山里の友がり訪はむやと誘はれけれど、ともにうちつれてたちいでぬ、道すがらおもいはれず、時々吹き來る風を命とたのみつゝ、やう〳〵到りつきぬ、あるじの友この暑さにここまで來まさんは思ひもかけざりしにと、其よろこびの程まづ面にあらはれぬ、今日はひねもす遊び給へ、とひもしかたりもすべきことも

あるものをといそぎ／＼として、とある一室にみちびかれぬれど、いつしかあつさもうすらぎぬ。こゝは人家まばらなる村はづれにて、前つ方は一面に田畑うちつゞき、さながら緑の毛氈しきたらん如く、後は木立しげりし山影なれど、涼しき風は何處ともなく吹きかよひ、またきに秋のけはひなり。ましてあるじのもてなしぶり、氣も心も打とけて、或はすぎこし昔の苦しかりしこと、あるは行さきの樂しからんこと、或は文のうたがはしきふし／＼あるは女の道などかたりつゝ興じけるにいつしか夕暮近くなりぬれど名殘惜しかれども、父の日とちぎりて家路にといそぎぬ。あはれ此の年頃今日ばかり夏をわすれて嬉しく樂しく、身も心もすが／＼しかりしことはあらざりけり。

奥原ふく子

夏をよそなる山里と古人のいひけんも、げに理りぞかし、背らに負へる青葉の山は、一面の緑樹を以ておほはれ、麓をめぐれる溪流は、あるは激して瑠璃盤上の珠とみだれ、あるはとゞまりて龍のすむてふ深潭となり、下りては十丈の瀑布をなし、散じては空に色ある長橋を描き出す、盛夏炎熱の候、一たび此地に入りて、みどりしたゝる老松の下、流れ清けき溪水のほとりに立ちよれど、むかしながらの清風は、迷ひの雲をうち拂ひ、心の塵を洗ひ去りて、さながら別世界に遊ぶの想あらしむ、此の山紫水明の地は、妾がいとも親しき故郷にて避暑の仙境青葉の里にぞありける。

津田徳子

照りつゝく夏の最中、わきて正午少しる過る頃の蒸し暑さ、げに瓦をとらかし、土をも焦さん樣なるに、外の方には絶間なき車の往かふ音、人のよばう聲など荒ましげなるに、苦しさもいよゝ增りぬべし、手にしたる團扇は賴もしけなるゐ、うちぬるみたる風は肌に冷かならしむるに足らず、かゝる厭はしきに引替ゐて、靜かなる山里に夏をよそなる住居、なかなかに心地よし、時鳥の二聲三聲啼き立つに、夢覺むれど、落ちかゝりたる梢の月かけかすかに早やしらみ渡る、東の空靑くあかくなりゆく、そよ／＼と吹く朝、東風透きとほりて肌冷かなるに、身は塵の世をのがれし心地す、このがじゝ生ひ茂る夏草踏分

けて、彼方此方さまように、はらく\と玉ちる露にしぼりあへぬ、袂涼しくもまたをかし、晝の熱さは岩間洩る清水の音に打ち消されつ。結ばぬ袖もすゞしげなり、日も漸う傾きつれは、夕風わたる一面の青田は、浪靜かなる湖水の如く、田草採るたのこは釣する海士に似たり、あはれ朝な夕な、看るもの聞くものとして夏を忘るゝ種ならぬはなし、ざるにても、田舍人の、いかに都こそはなど賑はしきをづめれど、塵たゝぬいなかの空氣より良きはなし、まして夏は殊更山里に若くものはわらさるなり。

降る雨の音かとぞおもふ山里は
庭の青葉の風そよぐにも

鷹野靜子

れのれつくゑによりて、唐土の文などよみつゝありけるが、あまりの暑にたへかねて、いざや暑をさけむやと、庭に出でゝあたり見まはし、たゝづめど、いづこともなく遠く近く、人の聲のかまびすしく聞こゆるにぞ、友ならめと戀しふて、この原を尋ねまはしく、聲をたよりにたより行けど一つの涼しげなる湖ありて、里の童兒等のこのもかのも水に入りて。遊びがてら暑をさけるなりけり、石によりて休むは龜の子の如く、浮びをよぐは水鳥のむれたるにさも似たり、あな見るわれだにそゞろ暑のさけらるゝものを、此童兒等のひねもす歸を忘るゝも、實にことはりなどゝ思ひつゝ、岸端の松の蔭に休らへど、吹きくる風のいと清く、鳴蟬の聲涼しけにひゞきけれど、氣ののびる限りなれやなど、一人りこちつゝ暑をさけ居れど、一人の友もやくそくしたらんが如く、全暑をさけむやと、又もやこゝに來りけれど、互に喜び限りなく、四方山の話すぎきしかたをかたらへつゝ、ふとみ空を詠むれど、早日脚の西に傾きしにれどろきて、つきぬ名殘も是非なくて、家にかへり來たりてなん。

兼題

八月廿日
歌……………寄海祝
文……………臺灣戰記を讀む

九月五日
歌……………早秋
文……………友を悼む詞

杉谷正隆編

修身百首

全一冊

菊判美本

近刊

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して讀人をして其の本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものなり我國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸趣を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の臨撰を請ひ給へかし

發行所

東京市京橋區築地二丁目四十一番地

（電話番號一九四六）

國光社

細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

女子の本分　全

●定價金二十五錢●郵税金四錢●郵券代用一割増

婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや、忽にして、三版を賣盡し今や四版の成るを告ぐ。請ふ。續々御注文あらんことを。

四版

近者、我邦女子道德の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田刀自、之に慨する處あり。本邦固有の道德に基きて、此の書を著し、以て我が邦の

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

（電話一九四六）

●賣捌所

東京　東京堂
同　東海堂
同　文海堂
同　北隆館
同　信文堂
同　良明堂
同　武藏堂
同　文金堂
同　小林新兵衛
同　目黒支店
同　三省堂
同　岩見屋支店
同　大倉書店
同　小林尚文館
同　笠原岩吉
大坂　岡島書店
京都　東枝律書房
仙臺　高橋書店
名古屋　川瀬書店
同　片野書店
福岡　積善館
熊本　長崎書店
同　宮松幸吉
千葉　平野常吉
同　堤安五郎
同　高寺清兵衛
同　根本紋二郎
川　吉田德兵衛
同　東定藏
同　名川屋本店
德島　晶崎二店

生田目經德編

標注 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
◎定價金廿五錢
◎郵税四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にをきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
（電話番號一九四六）

女鑑第百拾三號目錄

〔明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すへし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年八月四日印刷
同年八月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衞
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所(電話番號一九四六) 國光社
(印刷所 東京國光社印刷部)